

南相馬市内遺跡発掘調査報告書 1

— 平成17年度試掘調査報告 —

- 宮平遺跡
- 西内遺跡
- 桜井B遺跡 (第2次調査)
- 桜井D遺跡
- 新田原遺跡
- 石住遺跡
- 追合B遺跡
- 京塚沢B遺跡
- 上渋佐原田遺跡
- 泉館跡 (第2次調査)
- 京塚沢瓦窯跡B
- 与太郎内古墳群 (第5・6次調査)

平成18年3月
南相馬市教育委員会

序 文

文化財は、我国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつある一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成17年度に国及び福島県の補助金を得て実施した南相馬市内遺跡発掘調査事業の試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を、埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、地権者の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました方々に、心から感謝を申し上げます。

平成18年3月

南相馬市教育委員会
教育長 青木紀男

例 言

1. 南相馬市は、原町市・相馬郡小高町・河鹿島町の1市2町による市町村合併を経て、平成18年1月1日付で誕生した新市である。
2. 本報告書に記載した内容は、南相馬市教育委員会（旧原町市分）が実施した試掘調査の成果報告である。
3. 調査にかかる経費は、国及び福島県の補助金の交付を得ている。
4. 発掘調査は、以下の体制で実施した。

平成17年4月1日～平成17年12月31日

調査主体 原町市教育委員会

事務局 原町市教育委員会文化財課

平成18年1月1日～平成18年3月31日

調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化課

教育長 渡邊 光雄
事務局長 風越 清孝
事務局次長 西内 利幸
文化財課長 佐藤 俊正
課長補佐 二谷 真
主 査 渡邊 芳信
主 事 北原 美紀
事務補助 佐山 恵美

教育長 青木 紀男
事務局長 風越 清孝
事務局次長 藤原 直道
文化課長 烏中 清
課長補佐 引地 芳典
主 事 北原 美紀
事務補助 佐山 恵美

調査担当 文化財保護係

係 長 堀 耕平
副 主 査 齋藤 直之
文化財主事 荒 淑人
嘱託学芸員 藤木 海

調査担当 文 化 財 係

係 長 堀 耕平
主 査 佐藤 友之
副 主 査 川田 強
副 主 査 荒 淑人
学 芸 員 佐川 久
嘱託学芸員 藤木 海

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール 教授 辻 秀人

財団法人いわき市教育文化事業団 和深俊夫・中山雅弘・鈴木隆康・猪狩みち子

調査補助員 狹川麻子

整理補助員 新川幸子・山本恵子・渡部恵美・玉川美枝子・本山訓子・漢 陽子

発掘補助員 各調査遺跡に掲載。

5. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。

福島県相双農林事務所、深野行政区、大原行政区、雫行政区、泉行政区・金沢行政区、上太田行政区。

馬場行政区、上渋佐行政区、泉行政区、上太田は場整備施工委員会、天照御霊神社氏子一同、加藤建材工業株式会社、関場建設株式会社、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東北、(株)松岡建設、池端隆尋、池田十五、小元直直、北 廣、星 巖、今野勝藏、今野安則、宮崎和志、池田 茂、荒 和夫、星見宗重、坂本恒三、蒔田羊二、岡田榮一、酒井 繁、酒井愛子、岡田良雄、志賀正一(順不同敬称略)

6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。

文化庁文化財部記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ、福島県立博物館、(財)福島県文化振興事業団、福島県文化財センター白河館まほろん、二上裕嗣(原町市文化財保護審議会委員) 岡田茂弘、鈴木啓、玉川一郎、今泉隆雄・宮本長二郎、田中哲雄、佐川正敏、小林敬一(泉庵寺跡調査・整備検討委員会) 藤沼邦彦、山田昌久、樋泉岳二、(浦尻貝塚調査指導委員会) 飯村 均、小野田義和、藤原妃敏、森 幸彦、安田 稔、松岡 進(原町市史編纂委員会) (順不同・敬称略)

7. 本報告書に掲載した文章、挿図、図版は堀・齋藤・荒が執筆、作成した。

8. 本報告書の編集は堀・荒がおこなった。

9. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 遺物の断面黒ベタは須恵器、それ以外は白抜きで図示した。
3. 掲載した遺構・遺物の縮尺率は、図版の右下に記載し、挿図下方にスケールを付している。
4. 断面図の土層は、基本層位をⅠ・Ⅱ・Ⅲ…で、遺構堆積土をⅠ・Ⅱで表示した。
5. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。

T：トレンチ SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡 SK：上坑 P：ピット

SX：性格不明遺構

目 次

序 文	I
例 言	III
凡 例	IV
目 次	V
挿 図 目 次	VI
図 版 目 次	VI

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 地 理 的 環 境	1
第 2 節 歴 史 的 環 境	4

第 II 章 調査に至る経過

第 1 節 調査に至る経過	9
---------------	-------	---

第 III 章 調査成果

第 1 節 宮 平 遺 跡	11
第 2 節 西 内 遺 跡	14
第 3 節 桜 井 B 遺 跡 (第 2 次調査)	18
第 4 節 桜 井 D 遺 跡	25
第 5 節 新 田 原 遺 跡	28
第 6 節 石 住 遺 跡	31
第 7 節 追 合 B 遺 跡 (第 3 次調査)	34
第 8 節 京 塚 沢 B 遺 跡	39
第 9 節 上 渋 佐 原 田 遺 跡	42
第 10 節 泉 館 跡 (第 2 次調査)	44
第 11 節 京 塚 沢 瓦 窯 跡 B	47
第 12 節 与 太 郎 内 古 墳 群 (第 5・6 次調査)	49

写 真 図 版
報 告 書 抄 録
奥 付

挿 図 目 次

図 1	南相馬市位置図	1	図26	検出遺構平面図 (1)	37
図 2	南相馬市内地質図	3	図27	検出遺構平面図 (2)	38
図 3	南相馬市内主要遺跡位置図	8	図28	京塚沢 B 遺跡位置図	39
図 4	調査遺跡位置図	10	図29	調査区位置図	40
図 5	官平遺跡位置図	11	図30	トレンチ配置図	41
図 6	調査区位置図	12	図31	上洪佐原田遺跡位置図	42
図 7	トレンチ配置図	13	図32	調査区位置図	43
図 8	西内遺跡位置図	14	図33	トレンチ配置図	43
図 9	調査区位置図	15	図34	泉館跡位置図	44
図10	トレンチ配置図	16	図35	縄張図	46
図11	桜井 B 遺跡位置図	18	図36	京塚沢瓦窯跡 B 位置図	47
図12	調査区位置図	19	図37	遺構分布図	48
図13	出土遺物	21	図38	与太郎内古墳群位置図	49
図14	7・8 T	23	図39	古墳群位置図	50
図15	墳丘位置図	24	図40	古墳群測量図	51
図16	桜井 D 遺跡位置図	25	図41	1 号墳	53
図17	1 T 平面図	26	図42	5 トレンチ	55
図18	調査区位置図	27	図43	6 トレンチ	56
図19	新田原遺跡位置図	28	図44	7 トレンチ	57
図20	調査区位置図	29	図45	2 号墳	58
図21	トレンチ配置図	30	図46	3 A 区	59
図22	石住遺跡位置図	31	図47	4 区	60
図23	トレンチ配置図	33	図48	1 号墳全体図	62
図24	適合 B 遺跡位置図	34	図49	2 号墳全体図	63
図25	トレンチ配置図	36			

図 版 目 次

図版 1	官平遺跡	67	図版 3	桜井 B 遺跡 (1)	69
1	遺跡遠景		1	A 地区調査前	
2	調査区遠景		2	A 地区土層断面	
3	1 T 調査状況		3	4 T 調査状況	
4	2 T 調査状況		4	5 T 調査状況	
5	4 T 調査状況		5	作業風景	
図版 2	西内遺跡	68	6	A 地区埋め戻し作業	
1	調査前 (1T ~ 2T 周辺)		図版 4	桜井 B 遺跡 (2)	70
2	調査前 (3T ~ 6T 周辺)		1	7 T 調査状況	
3	調査前 (7T ~ 10T 周辺)		2	7 T 検出状況	
4	4 T 調査状況		3	7 T 調査後	
5	5 T 調査状況		4	8 T 調査状況	
6	作業風景		5	8 T と桜井古墳	
			6	8 T 埋め戻し作業	

図版5 桜井D遺跡……………	71	図版13 上渋佐原田遺跡……………	79
1 調査前 (1)		1 調査区遠景 (西から)	
2 調査前 (2)		2 調査区近景 (西から)	
3 1 T 土層断面		3 1 T (西から)	
4 2 T 土層断面		4 1 T (西から)	
5 1 T 全景		5 1 T 土層断面	
6 2 T 全景		図版14 泉館跡……………	80
図版6 新田原遺跡 (1)……………	72	1 遺跡全景	
1 調査区遠景		2 櫓台	
2 2 T 土層断面		3 東側の堀切	
3 1 T 土層断面		図版15 京塚沢瓦窯跡B……………	81
4 作業風景		1 遺跡全景	
5 1 T 調査状況		2 廃滓場	
6 2 T 調査状況		3 鉄滓散布状況	
図版7 石住遺跡 (1)……………	73	図版16 与太郎内古墳群(1)……………	82
1 調査区遠景 (1)		1 3 T 全景 (中央にSD-1)	
2 調査区遠景 (2)		2 SD-1 全景 (1)	
3 施設搬入状況		3 SD-1 全景 (2)	
4 調査前		4 SD-1 下半部	
5 1 T 調査状況		5 SD-1 と墳丘斜面	
6 6 T 調査状況		図版17 与太郎内古墳群(2)……………	83
図版8 石住遺跡 (2)……………	74	1 後円部全景	
1 4 T 調査状況		2 6 T 全景	
2 5 T 調査状況		3 墳丘積土と土層断面	
3 3 T 調査状況		図版18 与太郎内古墳群(3)……………	84
4 1 T 土層断面		1 5 T と 7 T	
5 作業風景		2 7 T 全景	
図版9 追合B遺跡 (1)……………	75	3 後円部墳丘面	
1 遺跡遠景		4 6 T 堆積状況	
2 32 T 土器棺墓		図版19 与太郎内古墳群(4)……………	85
3 41 T 製鉄炉跡		1 2号墳全景 (左が3A区、右が4区)	
図版10 追合B遺跡(2)……………	76	2 3A区全景	
1 42 T 製鉄炉跡		3 前方部中位墳丘面	
2 46 T 堅穴住居跡		4 墳丘面と旧表土	
3 6 T 焼成土坑		図版20 与太郎内古墳群(5)……………	86
図版11 追合B遺跡(3)……………	77	1 4区全景	
1 弥生土器 (32 T)		2 前方部西側前端	
2 弥生土器 (32 T)		3 前方部前面	
3 出土遺物 (1)		4 前端面墳裾	
4 出土遺物 (2)			
図版12 京塚沢B遺跡……………	78		
1 遺跡遠景			
2 調査前 (調査区北西部)			
3 6 T (南西から)			
4 10 T (北から)			
5 12 T (南から)			

第1章 南相馬市を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県南相馬市は福島県太平洋岸のほぼ中央に位置する、人口約73,700人、面積約398.5km²の当地方の産業・政治面における中核都市である。本市は平成18年1月1日付で、これまでの原町市、相馬郡小高町、同鹿島町の1市2町によって誕生した新市である。

南相馬市が位置する福島県は、東北地方太平洋側の最も南に位置し、北には宮城県・山形県が、西には新潟県・南には茨城県と栃木県で県境を接している。

福島県全体の地形を概観すると、県内を阿武隈高地と奥羽山脈の二つの山脈が縦断し、地形的には太平洋に面する浜通り地方、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた中通り地方、そして新潟県と接する会津地方に区分される。会津地方は周囲を山地に囲まれた盆地状平原を呈しており、中通り地方は阿武隈高地と奥羽山脈間を流れる阿武隈川によって開析された沖積地が開けている。太平洋に面した浜通り地方は阿武隈高地の山間部と小規模な低位丘陵の間に開析された沖積平野で構成される。

このような福島県において、南相馬市は太平洋岸に面した浜通り地方の中央やや北寄りに位置している。行政境としては、北は相馬市・南は双葉郡浪江町・西は相馬郡飯館村と接し、主要交通網は市内を南北に縦走するJR常磐線と国道6号であり、首都圏への移動や仙台・市内などへの通勤・通学手段として利用されている。近年では高規格道路としてその機能が期待されている常磐自動車道の建設が進められており、市内の道路網のあり方が大きく変容しつつある。

市内の地形に目を向けると、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成される。阿武隈高地にかかる西側の丘陵は、山頂がなだらかな隆起準平原を呈し標高は100～150mを測る。標高は東部の海岸部に向かうにつれて低くなり、市内中心付近の標高は50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。

地質的には阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉丘陵地域（岩沼一久の浜構造線）によって明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区別されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃・新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並んで日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩・変成岩類である。



図1 南相馬市位置図

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された大年寺層と総称される固結度の低い凝灰岩質砂岩ならびに泥岩で構成されており、双葉断層により上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。丘陵部では第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動によって海成及び河成の段丘が構成されている。段丘は大きく高位・中位・低位の3区分され、それぞれが第Ⅰ～Ⅲ段丘堆積物と細分されている。真野川流域では高位段丘堆積物が発達し、所々に自然堤防堆積物が見られる。新田川・太田川流域では上部に風化火山灰層をのせた礫及び砂で構成される高位第Ⅰ段丘堆積物と中位第Ⅱ段丘堆積物が広く発達し、小高川流域では中位第Ⅰ・第Ⅱ段丘が顕著である。また、低丘陵の間には各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。宮田川河口では、かつて井田川浦という東西1.8km、南北1kmという大きな潟湖が形成されており、大正末期～昭和初期にかけて干拓されている。潟湖を形成した浜堤は、浦尻貝塚の東に位置する北原貝塚遺跡群の東側の堤段丘から北に約1.7kmの広範囲に展開している。小高川河口においても浜堤と前川浦という潟湖が残されている。

市内の標高20m以下の地点では縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられている。大木2a式期の遺跡である菅浜赤沼遺跡の調査では縄文時代の海水面を標高6m前後に求められており、浦尻貝塚の調査では貝層から出土した魚骨類から縄文時代の自然環境が復元されており、目覚しい成果が上がっている。

＜参考文献＞

- 長島雄一 1983 『赤沼遺跡試掘調査報告書』 原町市教育委員会
玉川一郎 1985 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
川田強他 2004 『浦尻貝塚』1 小高町教育委員会
原町市史編纂委員会編 2005 『原町市史』8 特別編1自然 原町市

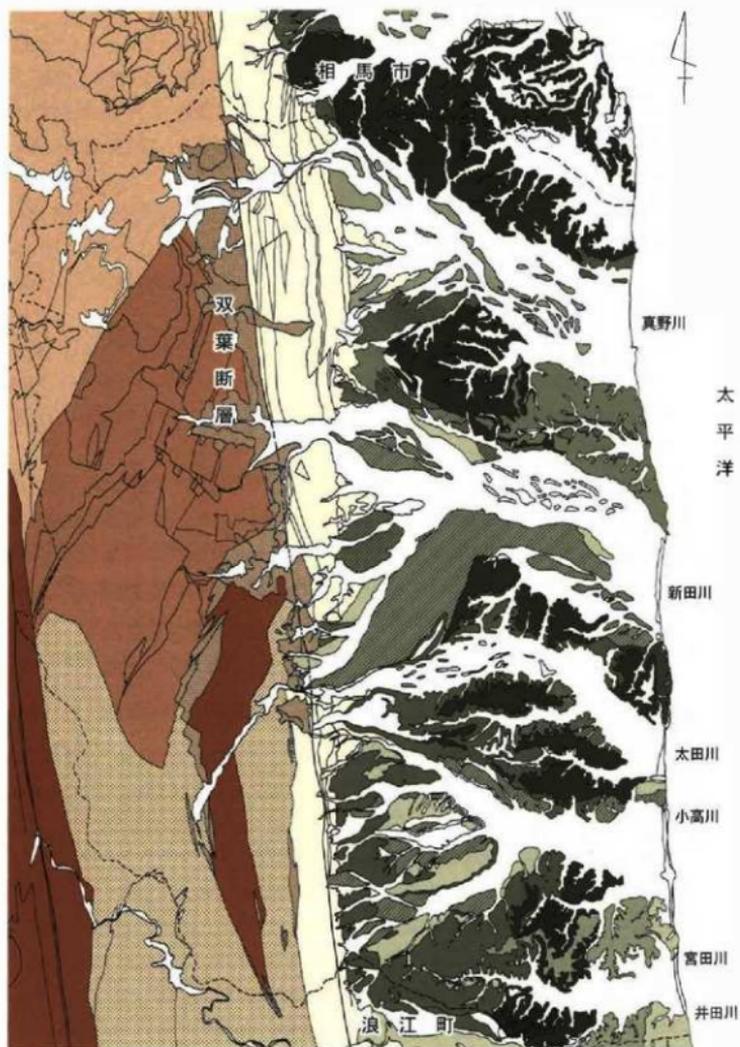


図2 南相馬市内地質図

第2節 歴史的環境

南相馬市で確認されている旧石器時代の遺跡としては、上真野川南岸の段丘上にある八幡林遺跡(1)、太田川流域の畦原段丘面にある畦原A・C遺跡(2・3)・熊下遺跡(4)・袖原A遺跡(5)・雲雀ヶ原原状地にのる陣ヶ崎A遺跡(6)・南町遺跡(7)・橋本町A・B遺跡(8・9)・桜井遺跡(10)、小高川の支流である北嶋原川南岸にある萩原遺跡(11)の11遺跡がある。後期旧石器時代の細石刃文化を代表するものが多く見られる。

縄文時代の遺跡は真野川・新田川・太田川・小高川・宮田川などの各地域を代表する河川に沿って分布している。真野川上流域の上橋窪にある宮後A遺跡(12)・宮後B遺跡(13)からは、大木7a～10式の縄文時代中期のものが多く出土し、その他には後期の綱取I式・新地式や晩期の粗製土器の出土もある。

上真野川と真野川に合流地点の南岸には八幡林遺跡(1)があり、中期の大木10式の複式炉を伴う住居跡をはじめとして、早期の田戸下層式・前期の大木5式・中期の大木8a～10式・後期の綱取I・II式・晩期の大洞A～A'式にかけた各時期の土器が出土しており、この場所で長期間連続した集落が存在していることを示す重要な遺跡と言える。

新田川・太田川流域では、山間部の片倉八重米坂A遺跡(14)・羽山B遺跡(15)・畦原F遺跡(16)で早期から前期にかけた時期の遺構・遺物が確認されている。海岸部にある菅浜の赤沼遺跡(17)では大木2a、雫の犬這遺跡(18)では前期前半の土器が出土している。中期では阿武隈高地裾部にある押釜の前田遺跡(19)、新田川北側の台地上にのる高松遺跡(20)では大木8～10式の土器が出土し、植松A遺跡(21)では大木10式の土器と複式炉をともなう住居跡が調査されている。後期から晩期の遺跡では、上太田の上ノ内遺跡(22)・町川原遺跡(23)は後期の綱取式を出土する。片倉の羽山遺跡(24)では晩期の大洞C1～A式が、高見町A遺跡(25)では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。

小高川・宮田川流域では貝塚を形成する集落が密集する。古い時期では宮田川流域の宮田貝塚(26)・加賀後貝塚(27)、小高川流域の片草貝塚(28)などは海岸線から離れた内陸部に位置し、前期前半の年代が想定される遺跡である。前期後半以降の貝塚遺跡は宮田川・井田浦の浦尻貝塚(29)や中期中葉に角部内南台貝塚(30)が代表的な貝塚として知られている。特に浦尻貝塚では前期後半から晩期中葉までの間、断続的ながらも長期間にわたる貝層が確認され、縄文時代全般を通じた生活様相や自然環境の変遷が把握されている。平成18年には国史跡に指定され、将来にわたる保存が決定された。

弥生時代としては真野川南岸の天神沢遺跡(31)や新田川南岸の桜井遺跡(10)が著名であったが、近年では少しずつではあるものの資料の増加を見ている。時期的に区分して見ると、前期から中期初頭まで遡る可能性のある遺跡は未確認で、具体的な様相についてはわからない。

集落や土器の出土が増加するのは中期からで、桜井古墳(32)や川内始B遺跡群F地点(33)では椀形甕が出土し、その他の遺跡では桜井式土器が多量に出土する。ただし、椀形甕・

桜井式期の遺跡についても良好な遺構はなく、集落の具体的な様相については不明である。

桜井式土器の標式遺跡となる大規模な集落遺跡が、新田川下流域の河岸段丘面に営まれた桜井遺跡(10)である。本遺跡については詳細な調査を経てはいないものの、多量の土器や各種の磨製石器が採取されており、この場所が弥生時代における拠点的な集落であった可能性が高い。桜井遺跡以外では、天神沢遺跡(31)が豊富な石器群が出土することで著名である。出土する石器群には石廬丁、扁平片刃石斧、太形蛤刃石斧・ノミ型石斧、打製石斧などがある。石廬丁には未完成の資料も含まれており本遺跡が石廬丁の製作工房遺跡であると評価され、これらの石器群は桜井遺跡において使用されたと考えられている。

後期から終末になると明確な遺構・遺物の数は激減するが、高見町A遺跡(25)からは北関東を中心に分布する十王台式土器が確認され、この地域が十王台式土器の文化圏に含まれていた可能性がある。一方で東北・関東地方にかけた広範囲に分布する天王山式土器の出土が少ない点は、この地域の弥生時代終末期から古墳時代初頭の特徴と言える。

古墳時代では、新田川南岸の河岸段丘上に前方後方墳として東北地方第4位の規模を誇る桜井古墳(32)が築造され、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋谷支群(34)・同高見町支群(35)を構成する。このうち国史跡桜井古墳、同古墳群上渋谷支群7号墳は4世紀後半の築造年代が与えられる。真野川流域の柚原古墳群(36)は円墳9基からなる小規模な古墳群であるが、周溝内からは埴笠式土器が出土し、桜井古墳群とは異なった前期古墳群のありかたを示している。当該期の集落遺跡の調査例は多くないが、高見町A遺跡(25)、桜井B遺跡(37)では東北地方の埴笠式土器や東海に系譜をもつと考えられるS字状口縁台付甕、棒状浮文をもつ加飾壺などが出土している。小高川流域の東広畑B遺跡(38)でも埴笠式土器が出土し、貴重な資料が得られている。

中期では唯一太田川流域にある太田前田古墳(39)が中期に築造された可能性がある古墳である。真野川流域では真野古墳群(40)・横手古墳群(45)は円筒埴輪を伴うことから、その造営開始は中期末まで遡る可能性がある。この時期の集落は新田川流域の前屋敷遺跡(42)で、いわゆる南小泉式の甕・高杯を多く出土する竪穴住居1軒が調査されている。この住居はカマドを有する以前のものであることから、中期でも古い様相を示すと考えられる。

古墳時代後期になると、新田川流域の桜井古墳群高見町支群、真野川流域の国史跡真野古墳群(40)、福島県史跡横手古墳群(41)など各河川流域で本格的に古墳群の造営が開始される。真野古墳群は100基を超える東北地方を代表する後期群集墳であり、寺内地内のA地区と小池地区のB地区に区分される。A地区の前方後円墳である20号墳からは国内では出土例が極めて少ない金銅製双魚袋金具が出土し、本古墳群の被葬者について大きな問題を提示している。横手古墳群は30m規模の前方後円墳を中心とするA地区と、30m規模の円墳を中心とするB地区に分けられている。A地区1号墳は切石を用いた典型的な横穴式石室を採用した前方後円墳であり、古墳時代後期でも新しい時期に築造されたと考えられる。これらの大規模群集墳が築造される一方で、市内の低位丘陵上では小規模な前方後円墳と円墳で構成される古墳群や円墳や方墳で構成される小規模な古墳群が造営される。後期の集落様相は調査例の少なさもあり、

詳細は不明であるが、真野川南岸の沖積地にある大六天遺跡(42)や迎畑遺跡(43)などでは住社式から栗圃式の住居跡や土坑などが、低位丘陵上で調査された地藏堂B遺跡(44)は住社式期、小高川流域の一里塚古墳群(45)では舞台式を出土する。同じく中村平遺跡(46)では栗圃式新段階の住居跡が確認され、古墳時代終末の集落遺跡についても徐々に資料の増加を見ている。

終末期に造営される横穴墓については、各河川において大きな分布状況の隔たりはみられず、終末期の普遍的な墓制と言える。このうち真野川の大窪横穴墓群(47)・太田川の羽山横穴墓群(48)、小高川の浪岩横穴墓群(49)は玄室に装飾をともなう形態であることが知られている。羽山横穴(48)は渦巻文・人物・動物などが描かれており、双葉町清戸迫横穴、泉崎村泉崎横穴との共通性が指摘される。また、真野川流域の中谷地横穴墓群は(50)複室構造であり、いわき市中田横穴との類似性がうかがえる。

奈良・平安時代における律令体制になると、南相馬市の全域と飯館村の一部が陸奥国行方郡家の支配する行政領域に編成される。行政の中心地となる行方郡家は新田川河口に造営された泉庵寺跡(51)であることが明らかとなっている。泉庵寺跡は新田川河口付近の河岸段丘縁辺から沖積地に立地し、遺跡に関連する遺構群は東西約1km、南北約200mの約120,000㎡の範囲に広がっている。また、古代の瓦が出土することや建物の基礎となる礎石が遺存していることから昭和31年に福島県史跡に指定された。調査の結果、郡家は7世紀末に造営が開始され10世紀代に廃絶するまでの間に、2度の大きな改変を経ながら律令政府の地方行政支配の拠点として機能していたことが明らかとなっている。郡家には郡庁・正倉・館といった施設とともに、運河状施設や各種瓦が出土することから寺院の存在も示唆される。泉庵寺跡の西側では路面状の硬化面と道路側溝の可能性ある溝があり、郡家に接して道路が建設されていた可能性もある。律令時代の行政構造を知るうえで重要な発見であり、その全容解明が待たれる。

市内には泉庵寺跡以外にも古代の瓦が散布する遺跡が認められる。すなわち真野川北岸の横手庵寺跡(52)、真野川南岸の真野古城跡(53)、新田川北岸の植松庵寺跡(54)、入道迫瓦窯跡(55)、太田川河口域の丘陵にある京塚沢瓦窯跡(56)、犬這瓦窯跡(57)である。このうち入道迫瓦窯跡は植松庵寺跡の瓦を焼成し、京塚沢瓦窯跡・犬這瓦窯跡は泉庵寺跡に瓦を供給した生産遺跡である。植松庵寺跡・横手庵寺跡は発掘調査が行われていないが、郡内有力豪族の氏寺の可能性もある。

生産関連遺跡では真野川・新田川・太田川の各河川両岸の低位丘陵で製鉄に関連した遺跡が確認されている。特に新田川と真野川の間に展開する金沢製鉄遺跡群(58)は東日本で最大規模の製鉄関連遺跡であり、7～9世紀後半にかけて継続した操業が行われ、製鉄炉や木炭窯などの各施設の具体的な変遷が判明している。太田川と小高川に挟まれた丘陵では蛭沢・川内迫B遺跡群(59)・出口遺跡(60)・大塚遺跡(61)などの製鉄遺跡が点在している。蛭沢遺跡(62)・川内迫B遺跡群は、具体的な内容が判明している希有な例である。遺跡は8世紀後半から9世紀後半にかけて製炭・精錬を行っている。特に廃滓場からは獸脚・器物の生産にかかわる鋳型が出土し、この遺跡で火舎などの仏具生産に関わっていたことが知られ、当地方において宗教活動が行われていたことを示す重要な発見である。

これらの遺跡で多くの知見が得られている一方で、集落遺跡の調査例は決して多くなく、広畑遺跡(62)・大六天遺跡(42)などが知られるに限る。新田川の沖積地内の広畑遺跡は、泉麿寺跡に隣接する遺跡である。溝に投棄された土器には「寺」「厨」など官衙に関連する墨書が見られ、また灰釉陶器も出土しており泉麿寺跡との密接な関係が想定される。

真野川南岸の大六天遺跡は、竪穴住居や土坑内に投棄された土器や円面硯、「小穀殿」と刻書された土師器杯を出土し、一般集落とは異なった様相を持つ。特に小穀殿の刻書土器は古代軍団制との関係が示唆される点で興味深い。太田川流域の町川原遺跡(23)では8世紀から9世紀後半の集落が見つまっている。竪穴住居を主体とする集落で、墨書土器や円面硯などの遺物とともに銅製の帯金具が出土しており、行政機構と集落の深い関係がうかがえる。

中世の代表的な遺跡としては城館跡が挙げられる。古い時期の遺跡から概観すると、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる太田川北岸の別所館跡(64 現太田神社)や、新田川と水無川に挟まれた丘陵突端に築かれた牛越城跡(65)は、相馬氏下向以前からの城館跡として知られている。別所館跡・牛越城跡はそれぞれ太田氏、牛越氏の居城であると伝えられており、特に牛越城跡は本丸・二の丸・三の丸・空堀・帯曲輪・腰曲輪・妙見館などが残っており、戦国から近世初頭には、短い期間ではあるが相馬氏の本拠として機能する。

小高川の氾濫原に延びた台地上に築かれた小高城跡(66)は典型的な中世城館である。台地の頸部を切断することで空堀とし、四周に壕や池をめぐらし、頂には土塁を築く。本館跡は下総国から奥州に下向した相馬氏の居城となり、嘉暦元年から慶長16年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約285年間相馬氏の本拠として重要な役割を占めた。

新田川下流域の城館遺跡では泉平館跡(67)、泉館跡(68)、下北高平館跡(69)で調査が行われている。相馬一族岡田氏の居城とされる中世末の泉平館跡では、郭を囲む小規模な畷堀を伴う堀跡と出入口が発見されている。この調査で堀跡から出土した木製呪符は中世信仰を知る上で貴重な資料である。泉館跡は、阿武隈高地から太平洋に向かって延びる丘陵の突端に立地し、相馬氏の流れをくむ泉氏の居城である。館跡の構造は部分的な小規模な改変を受けてはいるものの曲輪などの遺構は極めて良好な状態で遺存しており、その範囲は東西100m×南北60mと推定されている。また、平成9年度に実施した泉麿寺跡10次調査では、12・14世紀頃の舶載陶磁器を含む中世陶磁器が出土しており、相馬氏下向以前の地方支配の状況を知ることができる城館跡である。

近世の遺構は、寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手と出入口となる木戸跡や相馬氏の居城とされた牛越城跡がある。野馬土手は、雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmの範囲に築かれる。その大部分は土塁であるが菖蒲沢では石垣積みの部分もありその形態は多様であったようである。木戸跡は多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、その姿を遺しているものは羽山岳の木戸跡(70)一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場鉄山(71)や正福寺跡(72)、法幢寺跡(73)などで近世墓域の調査が行われている。

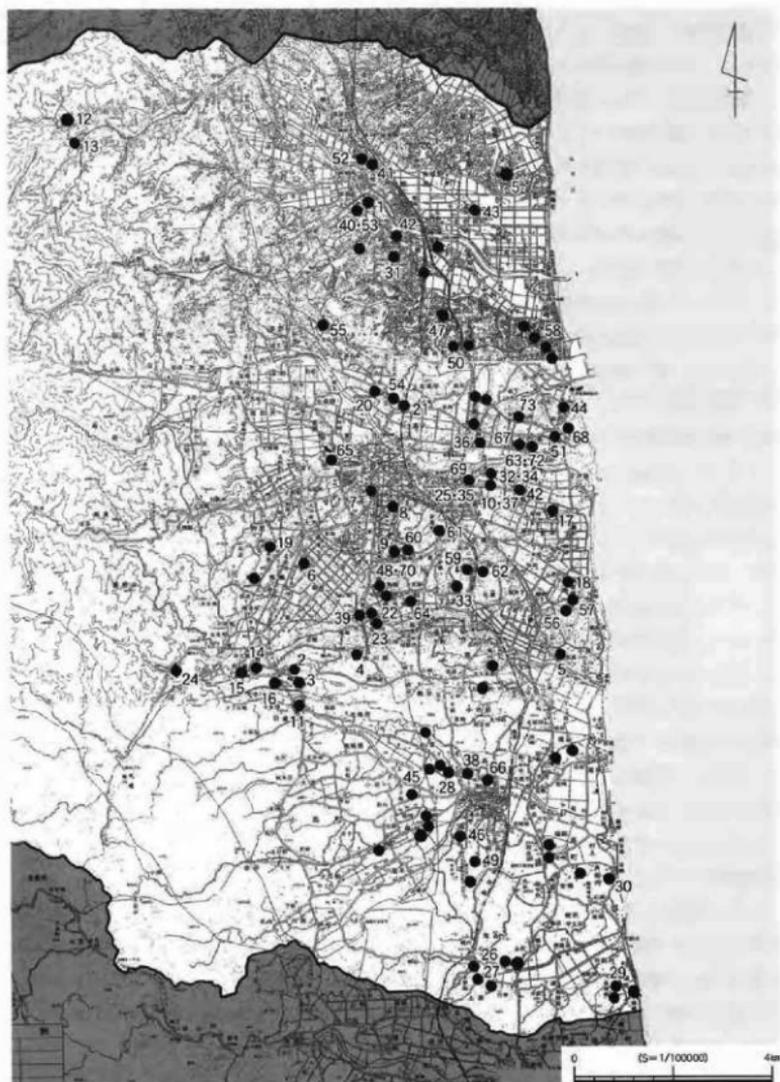


圖3 主要遺跡位置圖

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

本年度の市内における各種開発に対して、埋蔵文化財の保存協議資料を得るために実施した試掘調査は12件である。これらの開発事業は平成17年度になってから計画されたものが大部分であり、教育委員会では開発事業者と協議し計画の緊急性を考慮したうえで、当初の計画を変更し以下の開発事業に対して試掘調査を実施した。

調査を実施した遺跡は宮平遺跡・西内遺跡・桜井B遺跡・桜井D遺跡・京塚沢B遺跡・迫合B遺跡・新田原遺跡・石住遺跡・上渋佐原田遺跡・与太郎内古墳群・京塚沢瓦窯跡B・泉館跡である。

宮平遺跡・西内遺跡は市内西側の阿武隈高地山裾に所在する。宮平遺跡は縄文時代の遺物散布地、西内遺跡は縄文・平安時代の遺物散布地である。宮平遺跡は個人宅地建設にかかる調査で、開発面積は約2,000㎡である。西内遺跡は常磐自動車道建設に付帯した市道建設にかかる調査である。調査対象範囲は常磐自動車道の東側に隣接した約1,500㎡である。

石住遺跡は太田川上流域に所在する縄文時代の遺物散布地である。調査は農業基盤整備事業にともなうもので、本年度は施工区域とされた14,000㎡を対象とし200㎡を調査した。

桜井B遺跡は縄文時代から平安時代の遺構・遺物が確認されている複合遺跡であり、特に弥生時代と古墳時代の遺物の散布が多い。今年度の調査は市道改良にかかる試掘調査である。桜井D遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であり、個人宅地建設にかかる試掘調査として、40㎡を調査した。

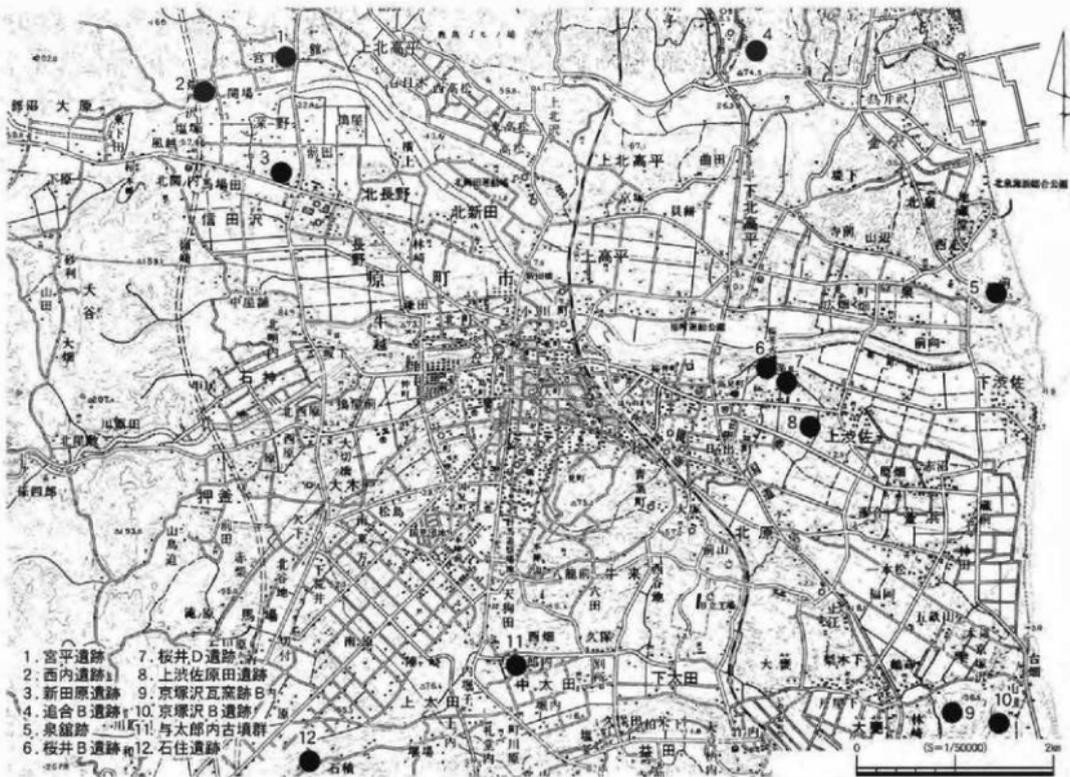
迫合B遺跡と京塚沢B遺跡は、土砂採取にかかる調査である。両遺跡とも平安時代の遺物散布地として登録され、該期の製鉄・製炭に関連した可能性のある遺跡である。また、市内の低位丘陵頂部から中腹からは弥生時代の土器や石器が採取されることが多い。迫合B遺跡は南相馬市内海岸部でも北側に寄った位置にあり、金沢製鉄遺跡群に隣接する。山砂採取にかかる面積は約60,000㎡である。京塚沢B遺跡は南相馬市内の海岸部でも南に寄る位置にあり、隣接地には京塚沢瓦窯跡が所在する。山砂採取にかかる面積は約10,134㎡である。

新田原遺跡、上渋佐原田遺跡は携帯電話中継無線基地建設にともなう試掘調査である。新田原遺跡は40㎡、上渋佐原田遺跡は20㎡を調査した。新田原遺跡は新田川上流域左岸の河岸段丘縁辺に所在する奈良・平安時代の遺物散布地、上渋佐原田遺跡は弥生時代～奈良時代の遺物散布地である。

泉館跡は、阿武隈高地から太平洋の海岸線に向かって派生した低位丘陵上に所在する中世城館跡である。開発は城館の北側隣接地において計画された大規模土地利用計画に対して、城館範囲を確認するために縄張り図を作成した。

京塚沢瓦窯跡は行方郡家に瓦を供給した瓦窯跡であり、各種開発に対する試掘調査の事前調査として分布調査を実施した。与太郎内古墳群は保存目的のための範囲確認調査として、125㎡の調査を実施した。

図4 調査遺跡位置図



第III章 調査成果

第1節 宮平遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は平成17年5月に個人住宅建設に際して提出された「埋蔵文化財の有無について（照会）」に基づいて、埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに同月に現地踏査を実施した。当該計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地である『宮平遺跡』が所在しており、試掘調査による遺構・遺物の確認と、その結果による保存協議が必要である旨を回答した。

第2項 遺跡の概要

宮平遺跡は、南相馬市街地西寄りの阿武隈高地裾部に位置し、これまでに表面採集により大木1・4・5式の縄文土器片とともに石匙・石斧・石棒・石錘、そして炭状耳飾が採集されており、縄文時代の遺物散布地として登録されている。

遺跡の南側には新田川が流れ、遺跡の北側は小規模な開析谷である。遺跡は微高地の上面に立地し、東西約350m、南北約200mの範囲と推定されている。今回の開発予定区は遺跡最東端の微高地先端に位置している。

周辺には道ノ上遺跡・風越B遺跡・北原田A遺跡・北原田B遺跡などが所在している。いずれの遺跡も奈良・平安時代の遺物散布地として登録されているが、詳細は不明である。



図5 宮平遺跡位置図

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地に幅1m×10mの調査区を4箇所に向け、遺構・遺物の確認に努めた。作業は、表土除去から遺構検出作業・埋め戻しにかかる全ての作業を人力で行った。

調査記録の作成は、記録写真は35mm判カラーネガフィルム・カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで行った。

第4項 調査要項と調査成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区深野字宮平地内

調査期間 平成17年6月1日～3日

対象面積 2,000㎡

調査面積 40㎡

調査担当 荒 淑人

発掘補助員 荒 洋子・春日三千代・齋藤光男・鈴木時江・鈴木令子・田中裕史

林崎喜代子・益山富士子

調査成果

1 T：1 トレンチは調査対象区の中で最も東側に設けたトレンチである。トレンチの規模は幅1m×長さ10mとし、表土除去から基盤層確認までの全ての作業を人力で行った。現地表面から基盤層までの深さは約30cmであったが、遺物・遺構は確認されなかった。

2 T：2 トレンチは1 トレンチの西方に設けた南北トレンチである。トレンチは1m×10mの規模で設定し、表土除去から基盤層確認までの全ての作業を人力で行った。本トレンチからは表土層から陶器3片と縄文土器1片が出土したが、いずれも本地区に遺構の存在を示すものではない。また基盤層に到達しても遺構・遺物は確認されなかった。

3 T：3 トレンチは1・2 トレンチを設置した平坦部の北辺を面する谷を挟んだやせ尾根上に設けた。トレンチは尾根筋に直行する南北方向に設定した。トレンチの規模は幅1m×長さ10mとし、表土除去から基盤層確認までの全ての作業を人力で行った。表土から基盤層までの深さは約20cmであったが、遺物・遺構は確認されなかった。



図6 調査区位置図

4T：4トレンチは3トレンチの西方に設けたトレンチである。3トレンチと同様に尾根筋に直行する南北トレンチとし、幅1m×長さ10mで設定した。表土を除去して基盤層を確認する過程の間で、遺構・遺物は認められなかった。

第5項 調査所見

今回の試掘調査では遺跡の内容を明らかにするような知見を得ることはできなかったため、宮平遺跡の中心は今回の調査区より西側に展開するものと想定される。従って、

今回の開発計画に際しては発掘調査の必要はないと判断されるが、工事の施工に際しては慎重な工事を要し、また本遺跡内の開発行為においては今回の調査対象より西側部分では注意を払う必要がある。

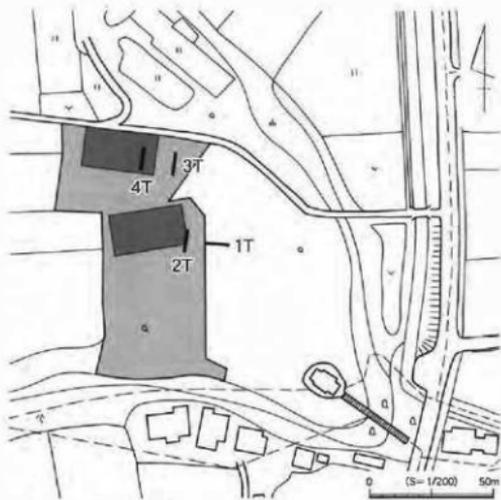


図7 トレンチ配置図

第2節 西内遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、常磐自動車道建設に関連した南相馬市道の建設にかかる試掘調査である。今回の調査は、埋蔵文化財包蔵地内における砂利舗装敷工事用道路建設の計画にともなって関係機関と協議を進めた結果、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施し、その結果をもって保存協議をすることとした。

第2項 遺跡概要

西内遺跡は南相馬市原町区大原字西内に所在する、縄文・奈良・平安時代の遺物散布地である。本遺跡の北側から西側にかけての範囲は阿武隈高地の山裾が迫り、遺跡の南側から東側には新田川によって形成された沖積地が広がる。

本遺跡の周辺には仲山A遺跡・風越B遺跡・宮平遺跡など縄文時代を中心とした遺跡が点在し、特に東方約800mに位置する宮平遺跡では大木1～3式の土器片や玦状耳飾が採取されている。

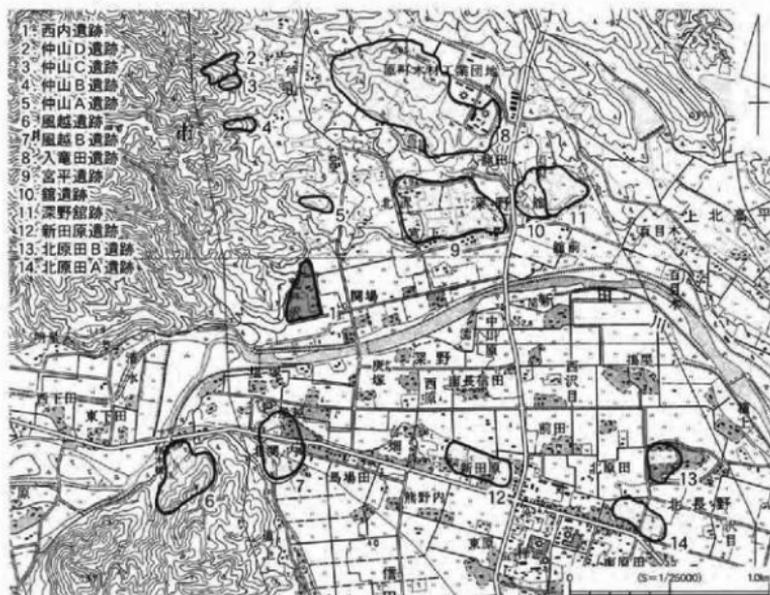


図8 西内遺跡位置図

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地内に幅2m×5mの調査区を9箇所、1m×5mの調査区を2箇所に設け、遺構・遺物の有無を確認した。表土除去と埋め戻し作業は0.25㎡の重機を用い、それ以外の遺構検出作業や精査作業は人力で行った。調査記録の作成は、35mm判カラーネガフィルム、モノクロフィルムでおこなった。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区深野字西内

調査期間 平成17年7月11日～14日

対象面積 1,800㎡

調査面積 90㎡

調査担当 荒 淑人

発掘補助員 荒 洋子・田中裕史・齋藤光男・中島真一・小畑哲彦・佐藤美奈子・鈴木令子
鈴木時江・青田 栄・境 正憲・益山富士子・春日三千代・林崎喜代子

調査成果

基本土層：本調査地点では6面の基本土層を確認した。最上層に位置するLⅠは表土層である。約15cmを平均とする耕作土である。LⅡは表土直下の灰褐色砂質層である。土層自体は比較的しまりが強く、所々にはマンガン沈着による赤褐色土を含む。LⅢは調査対象地南部と北部で異なるが、調査区南部に広がるLⅢaは黒褐色を主体とする砂質土である。この層は3・4Tを中心に2～6Tの範囲において確認した。一方、対象地の北部には黄褐色土を主体層とし、風化した礫や黒褐色土・灰白色粘土を不規則に含むLⅢbが分布する。厚さは5cm程度の比較的薄い堆積で7～11Tの範囲に認められる。LⅣも南部と北部で異なり、南部に広がるLⅣaは明褐色砂質層、北部に広がる風化した礫を含む黒褐色砂質層はLⅣbとした。LⅣaの下層にはやや赤味がかかった黄褐色砂質層で構成されるLⅣaが認められる。LⅣaは15cm程度の厚さで、基盤層であ



図9 調査区位置図

る黄褐色砂礫層 (LⅥ) へ到達する。LⅤbは黄褐色砂質層に風化礫を含む層である。LⅤbについては現地表面から1.5mまで掘り下げて更に下層面の確認に努めたがLⅥを確認することはできなかった。南部で認められたLⅥは1TではLⅡ直下で検出され、4T付近までは確認された。

- 1 T : 1トレンチは調査対象区の最も南側に設けた2m×5mの調査区である。厚さ約10cmの表土を除去すると、下層には地山相当の黄褐色砂礫層が露呈する。地山相当の基盤層に到達しても遺構・遺物は認められなかった。
- 2 T : 2トレンチは1トレンチの北側に隣接する2m×5mの調査区である。厚さ約10cmの表土下層にはLⅡとLⅢaが確認されたが、遺構・遺物は認められなかった。
- 3 T : 3トレンチは調査対象区中央に位置する2m×5mの調査区である。厚さ約20cmの表土の下層ではLⅡ、LⅢa、LⅣを確認した。遺構・遺物は認められない。
- 4 T : 4トレンチは3トレンチに隣接する調査区である。2m×5mで設定し、層位順に堆積土を除去した。表土・LⅡ・LⅢa・LⅣ・LⅤ・LⅥを確認したが、各面で遺構・遺物は認められなかった。
- 5 T : 4トレンチの北側約12mの地点に設けた2m×5mの調査区である。表土の下にはLⅡ・LⅢb・LⅣb・LⅤbを確認した。遺構・遺物は認められない。
- 6 T : 6トレンチは対象地の最も北側に広がる水田面に設けた、2m×5mの調査区である。調査は、約20cmまで掘り進みLⅢb上面を確認した時点で湧水が始まり、掘削を中断した。

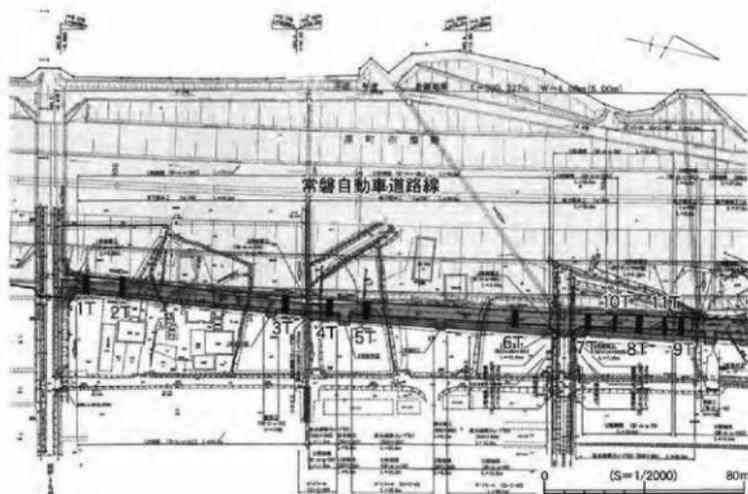


図10 トレンチ配置図

- 7 T : 7 トレンチは 6 トレンチの北側 30m の地点に設けた 2m × 5m の調査区である。表土除去後 L IV b を確認するまで遺構・遺物はみられず、L IV b 上面を調査停止面とした。
- 8 T : 8 トレンチは調査対象地の最も北側に設けた 2m × 5m の調査区である。表土除去後、L II ・L III b ・L IV b ・L V b までを確認した。L V b は現地表面から約 40m まで掘り進んだが下層面を確認することはできなかった。遺構は確認できず、L I から内黒土師器杯片 1 点、土師器甕片 1 点、陶器 2 点が出土した。
- 9 T : 9 トレンチは 6 トレンチと 7 トレンチの間に設けた、1m × 5m の調査区である。表土の下層から L III b を検出したが、遺構・遺物は認められなかった。
- 10 T : 10 トレンチは 7 トレンチと 8 トレンチの間に設けた 1m × 5m の調査区である。表土の下層から L III b を検出したが、遺構・遺物は認められなかった。

第5項 調査所見

本遺跡の調査では、明確な遺構を確認することはできなかった。遺物は 9 トレンチの表土層、L III b 上面から土師器片 2 点と陶器片 2 点が認められたが、いずれも表土層近くからの出土であることから、本地区内における遺構の存在を示すものではなく、おそらくは対象区外から流入したものであると考えられる。

このような調査成果と本土木工事内容を検討した結果、本地区内における発掘調査の必要はないと判断されるが、埋蔵文化財包蔵地内では慎重工事を必要とする。

第3節 桜井B遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、平成18年1月初旬に桜井古墳南側に隣接する市道ならびに住宅地を挟んだ南側を東西方向に走る市道の2箇所で道路改良工事が計画された。

今回の開発計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置しているため、桜井古墳から離れた市道をA地区、桜井古墳に隣接する市道をB地区とし、調査は開発事業を一時休止する形で、遺構の有無を確認し保存協議のための資料を得るために試掘調査を実施した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は、新田川下流域の河岸段丘の上面に立地する弥生時代から平安時代にかけての散布地である。この範囲は広義の「桜井遺跡」として知られているが、現在の桜井遺跡は更にA～Dの4地点に細分されて登録されている。今回の調査箇所は遺跡の中央部の桜井B遺跡に内包され、また本遺跡内には桜井古墳群に関連する古墳が分布する範囲として捉えられている。

現在では、桜井古墳群は河岸段丘の縁辺に沿って東西に長い範囲に分布しているが、かつては桜井遺跡周辺に数十基の墳丘が認められ、福島県史には現在では確認することのできない古墳が図示されており、桜井古墳群に関連する古墳が広がる可能性も高い。

第3項 調査の方法

今回の開発計画は幅4mへの市道改良であり、調査は路線内に幅1.5m前後の調査区を任意



図11 遺跡位置図

で設けた。調査区は隣接する住宅地への出入りに配慮して、A地区では4箇所、B地区では3箇所の合計8箇所を設定した。

調査は表土から遺構検出面に到達するまでの堆積土を0.25mのバックホーにて除去し、それ以降の遺構検出作業・精査作業は人力でおこなった。調査区内から遺物が出土した場合は、出土位置・層位・日付を記録した上で取り上げた。

記録写真の作成は35mm判カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルム・カラーネガフィルムの3種類で作成し、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、遺構が確認されなかった調査区については地形図に調査区を図示するに留めたが、遺構が確認された調査区の場合は平板測量で作成した。

第4項 調査要項と調査成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区上洪佐字原畑

調査期間 平成18年1月21日～26日

対象面積 1,500㎡

調査面積 145㎡

調査担当 荒 淑人・藤木 海

発掘補助員 酒井和秋・田中裕史・齋藤光男・中島真一



図12 調査区位置図

調査成果

- 1 T : 本調査区は A 地区の東側に設けた 10m × 1m の東西トレンチである。調査区の北辺には上水道による掘削を受け、南辺は U 字溝による掘削を受けている。基盤層となる地山ロームは深さ約 60cm で到達したが、この過程の中で遺構・遺物は確認されなかった。
- 2 T : 本調査区は 1T の西側約 25m の地点に設けた 11m × 1m の東西トレンチである。基盤層となる地山ロームは深さ約 70cm の地点で確認され、現道路盤が約 45cm と旧耕作土 25cm の 2 層に細分される。遺構・遺物は確認されなかった。また、地山面を掘削して埋設された上水管 2 本が調査区を横断しているが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 3 T : 本調査区は 2T の西側に設けた 24m × 1m の東西トレンチである。地山を確認するまでの上位堆積土は 3 層に区分された。最上層には現道路盤となる碎石が約 30cm、その下位には旧耕作土とローム前位層が堆積する。調査区の北東から南西に向かって上水管が埋設されている。地山を確認するまでの過程のなかでは遺構・遺物を認めることはできなかった。
- 4 T : 本調査区は A 地区の最も西寄りに設定した調査区である。調査区は 11m × 1m で長辺を東西に向けている。地山ロームは深さ約 45cm の地点に位置し、堆積土は上位より道路路盤、旧耕作土、遺物包含層、ローム前位層に細分される。遺物包含層には桜井式土器が含まれる。遺構は確認されなかった。
- 5 T : 本調査区は B 地区の最も西寄りに設けた 17m × 2m の調査区である。地山ロームを確認した深さは、調査区西側では約 50cm で東に向かって徐々に深くなり、調査区東端付近では約 1m の地点で検出された。上位堆積土は道路路盤を含む 3 層に区分されるが、暗褐色土を主体とする遺物包含層には土師器を含む。地山を確認した時点では幅 1.5m の溝を検出した。

出土遺物

5T からは 414 点の土器が出土した。内訳は弥生土器 233 点、土師器 110 点、その他 71 点である。出土遺物の大部分は図化の困難な小破片であり、今回はその器形や特徴の分かる 18 点を図示した。

1 から 13 は弥生土器である。1 ～ 9 は半裁竹管状工具による平行沈線文で文様を描いている。1・2 は口縁端部が確認できる資料で、文様は緩やかな弧を描いていることから、同心円文もしくは重三角文の可能性がある。5 は左巻きの渦巻き文である。3・4 は重菱形文である。いずれも体部上半の資料である。9 は体部中位の資料で、上位の平行沈線による施文部と下位の縄文帯を区画する部分の範囲であり、両文様を区画する横位の沈線文が見られる。10 ～ 13 は体部下位の施文帯である。

14 ～ 18 は土師器である。15 は S 字状口縁の甕である。残存している部位は口縁部から体部上半にかけての範囲である。強く内傾する体部は頸部に到達し、強く外傾して口縁部に向かう。

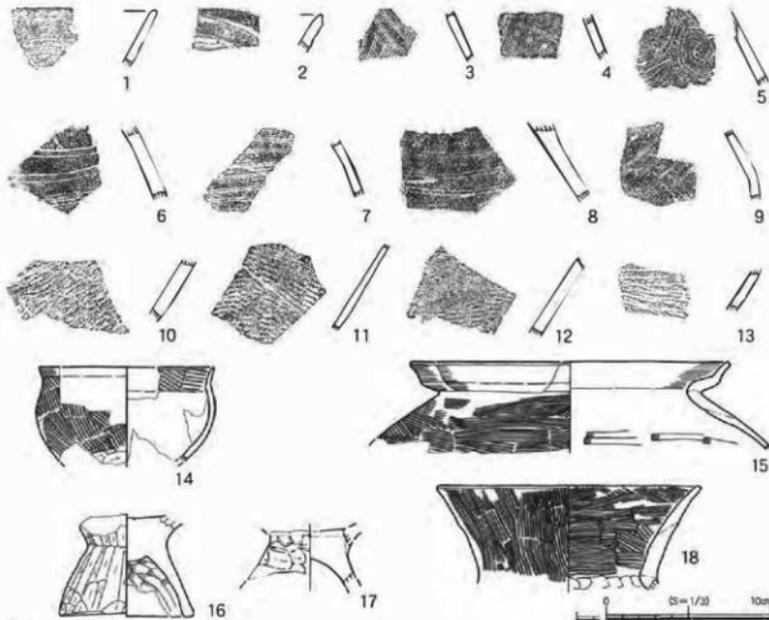


図13 出土遺物

表 桜井B遺跡試掘調査出土遺物観察表

押図	出土遺構	器種	部位	法量(器厚)		文様・調整	備考
				口径/器高/底径			
1	5T包含層	鉢	口縁部	0.5		内面：ナデ 外面：多重平行沈線文	
2	5TL I	鉢	口縁部	0.6		内面：ナデ 外面：多重平行沈線文	
3	5T包含層	壺	胴部	0.5		内面：ナデ 外面：連続三角文または重菱形文	
4	5T包含層	壺	胴部	0.6		内面：ナデ 外面：重山平行沈線文	
5	5TL I	壺	胴部	0.6		内面：ナデ 外面：重弧平行沈線文	
6	5T包含層	壺	胴部	0.8		内面：ナデ 外面：重弧平行沈線文	
7	5TL I	壺	胴部	0.6		内面：ナデ 外面：横位多重平行沈線文	
8	5T包含層	壺	胴部	1.1		内面：ナデ 外面：横位平行沈線文	
9	5TL I	壺	胴部	0.6		内面：ナデ 外面：重弧平行沈線文	
10	5T包含層	壺	胴部	0.8		内面：ナデ 外面：直前段反巻 LLR	
11	5TL I	壺	胴部	0.5		内面：ナデ 外面：直前段多条 LAR ?	
12	5T包含層	壺	胴部	0.7		内面：ナデ 外面：附加条1種 RL+R	
13	5T包含層	壺	胴部	0.6		内面：ナデ 外面：附加条1種 RL(カ)+R	
14	5T包含層	鉢	口～体部	(10.6)/(5.8)/-		内面：ハケメ、ナデ 外面：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	
15	5T包含層	甕	口～体部	(19.0)/(5.5)/-		内面：ヨコナデ、ヘラナデ 外面：ヨコナデ、ハケメ	
16	5T包含層	台付甕	台部	-(6.1)/8.1		内面：ナデ 外面：ナデ又はハケメ(タテ)	
17	5T包含層	台付甕	台部	-(3.7)/-		内面：ナデ 外面：ユビナデ、ヘラナデ	
18	5T包含層	壺	口縁部	(15.8)/(6.4)/-		内面：ハケメ(ヨコ)、ヘラオサエ 外面：ハケメ(タテ)	

口縁部は緩く外湾しながら立ち上がる。外面調整は横位を主体とするハケ調整がおこなわれ、口縁部から頸部にかけてはヨコナデが明瞭である。内面には所々にユビナデが残るが、大部分はナデ調整である。判断できる範囲の法量は、口縁部直径19.4cmである。16と17は台付臺の台部である。外面は縦方向のケズリ、内面はユビナデによる調整が顕著である。台部の直径は8.2cm 高さは4.2cmを測る。

14は鉢である。口縁部から体部下半にかけての範囲である。底部は欠損している。丸みの強い体部は緩やかに外傾しながら立ち上がる。体部中央の最大径を測る部分を過ぎると、弱く内傾したのちに頸部に到達する。頸部は弱くくびれたのちに、短く立ち上がり口縁部を形成する。外面調整は密度の粗いハケ、口縁部内面はハケ、体部はナデである。口縁部の直径は10.6cmを計測する。

18は壺の口縁部であるが、体部は欠損しており不明である。口縁部直径は16.0cmである。体部の形状は分からないが、口縁部は外湾気味に外傾しながら立ち上がる。外面には縦位のハケ調整、内面には横位のハケ調整が明瞭である。

6T：本調査区は5Tの東側に設けた16m×2mの東西トレンチである。地山面を確認するまでの間では遺構・遺物を確認することはできなかった。

7T：本調査区はB地区のほぼ中央部に設けた1.5m×40mの調査区である。砕石を含む道路盤を除去すると、黒褐色主体層と調査区西部で黄色ロームが検出される。ロームは東に向かって徐々に標高を下げており、最終的には調査区西端と東端の比高差は約70cmを測った。遺構としては、地山面を掘り込んだ溝状の遺構が4箇所（SD1～SD4）、土坑状の掘り込みが1箇所（SK1）で確認された。

SD1：調査区の西端で確認した上端幅0.9mを測る南北方向の溝である。遺構内部の掘り込みは行っていないため、深さや断面形態は不明であるが、遺構内の堆積土の観察の結果、遺構内堆積土は黒色土を主体とし、最終堆積土には灰白色火山灰と思われる混入物が明瞭に確認される。

SD2：調査区のほぼ中央で確認した、上端幅2.0mの南北溝である。遺構内の堆積土は黒色土を主体とし、所々に灰白色火山灰を包含する。遺構の掘り込みは行っていないために断面形および深さは不明である。

SD3：調査区のやや東よりで検出した南北溝である。上端幅は1.1mを計測する。上記の溝と同様に黒色土を主体とする遺構内堆積土には灰白色火山灰を含む。

SD4：調査区の最も東側で確認した。検出した範囲は、遺構西側の上端だけであり厳密な意味で溝跡であるかは不明であるが、SD1・2・3と同様に黒色土を主体とする堆積土には灰白色火山灰を含むことから溝状の遺構である可能性が高いと判断した。

SK1：本遺構は調査区のほぼ中央部に位置し、SD2・SD3に挟まれた地点に位置する。遺構は地山である黄色ロームを掘り込んでおり、遺構の内面には上述の溝とは異なる暗褐色土が堆積している。調査区内で確認できた遺構の幅は約1.7mを計測する。

8 T : 本調査区は B 地区の最も東側に設けた 2m × 10m の調査区である。碎石を含む道路面を除去すると黒色土を主体とする厚い堆積土は道路整備以前の畑地耕作土である。この層を除去すると黄色ロームが検出される。この地山は調査区を東西に縦断して走り桜井古墳丘陵のラインと平行して走る。

第5項 調査所見

今回の市道改良にともなう試掘調査では、桜井 B 遺跡のほぼ中央部と遺跡北端の 2 箇所に東西方向の調査区を設けることとなった。以下、調査成果を総括する。

まず、遺跡の中央部を横断する A 地区では明確な遺構・遺物は認められず、本調査地区付近が、弥生時代もしくは古墳時代に集落などとして利用されていたかは不明である。平成 15 年に実施した 1 次調査区も本地区に隣接しており、このときの調査でも遺構・遺物は認められていない。したがって、本調査地区付近については、当該期の集落から見れば、その中心地から離れた地点であると考えられ、今回の開発計画に際しては本調査の必要はなく、工事施工に当たっては慎重に工事施工することで対応が可能である。

遺構・遺物が確認された B 地区では、最も西端に位置する 6 トレンチでは古墳時代前期に位置付けられる S 字状口縁台付甕やミガキを多用した小型壺もしくは鉢と思われる破片が見られ、古墳時代前期の集落が展開している可能性が高い。これまでに当該期の遺構が確認されて

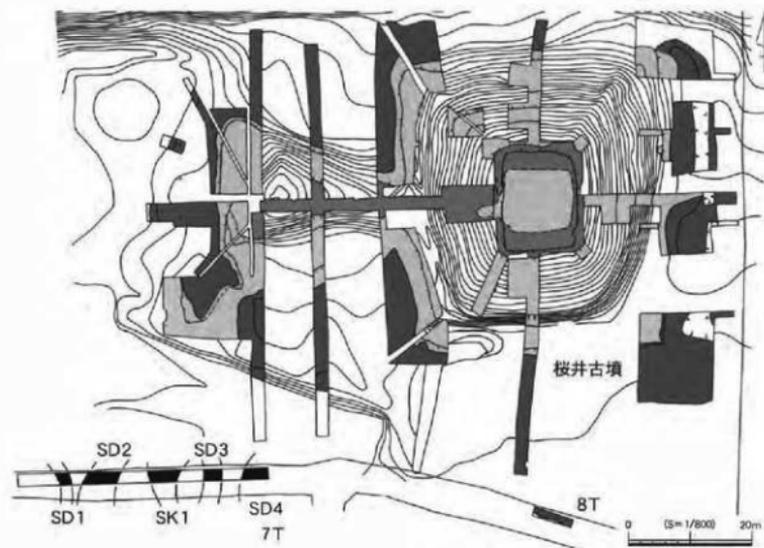


図14 7T・8T

いるのは本遺跡と谷を挟んだ地点に位置する高見町A遺跡に限られていたことから、これら古墳時代前期に位置する集落が谷を挟んだ本調査地点まで広がる可能性が示唆され極めて重要な知見である。

B地区7トレンチでは4条の溝跡が確認された。SD1はやや西に向かって内湾気味にめぐり様子から調査区に広がる古墳周溝の可能性がある。SD2は東に向かって内湾し、SD3は西に向かって内湾する様子から、SD2・3はともに同じ古墳にめぐり周溝であると想定しておきたい。この2条の溝が一連の周溝であると仮定すると、この周溝に囲まれた古墳の墳丘規模は溝の真心間距離で約18mを計測することとなる。また、この溝に囲まれたSK1は本古墳の埋葬施設の可能性も考慮しておく必要がある。調査区の最も東側で確認されたSD4は、遺構全体の規模は確定していないため、古墳にかかる周溝か否かは不明である。ただし、福島県史に図示されている古墳の位置図を見ると、この遺構も図示されている古墳の周溝である可能性がある。SD4を古墳周溝として仮定すると、B地区7トレンチで確認された古墳は福島県史に図示された古墳の位置・数とも一致することになり、これらの遺構がいずれも福島県史で明記された古墳である蓋然性が高くなる。今回の調査においてはいずれの遺構も遺構の平面形を確認したに留めたため、遺構の年代を決定する資料を得ることはできなかったが、SD1～4の堆積土には灰白色火山灰が認められている。これまで高見町A遺跡や桜井古墳周溝・埋葬施設陥没坑からは種名一伊香保テフラ(Hr-FP)が検出されており、今回確認された火山灰も同様のものである可能性が高い。Hr-FPの降下年代は6世紀中葉から後半と想定されており、本古墳の遺構の年代もまた6世紀後半以前として捉えられることになる。

最後にB地区東端の8トレンチでは黄色ロームを掘り込んだ遺構が確認された。これは、他の溝状遺構とは異なり東西方向にめぐっており、上述のような6世紀代の古墳のあり方とは異なっている。この遺構の性格を考える上では、桜井古墳の調査成果が参考となる。桜井古墳の調査では、後方部南側の周溝の範囲を限定するために設定した19トレンチ内では、史跡内においては周溝の外周上端を捉えることができなかった。一方、平成15年には本調査地点を挟んで南側の個人宅地建設にかかる2次調査では、平安時代の竪穴住居が確認され、この地点までは桜井古墳の周溝が広がっていないことが確認された。したがって桜井古墳の周溝は今回道路計画となった地点内に位置している可能性が極めて高く、8トレンチで確認された東西方向に走る遺構は、桜井古墳の周溝の外周線である可能性が極めて高い。

このような調査成果から、B地区には古墳時代前期から後期にかけての遺構・遺物が認められたことから、開発計画においては、遺跡の保全に関する保存協議が必要である。

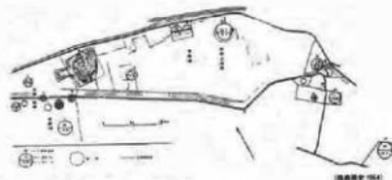


図15 墳丘位置図(福島県史より)

第4節 桜井D遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、平成17年7月に提出された「埋蔵文化財の有無について(照会)」の提出に基づいて、福島県埋蔵文化財包蔵地台帳との照合、ならびに現地踏査を実施した結果、本地点は桜井■遺跡内に所在していること、平安時代の遺物が散布していることを確認したため、開発計画にあたっては事前に試掘調査を実施し、保存協議が必要であることを回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は新田川下流域の河岸段丘上面に立地する、弥生時代～平安時代までの複合遺跡である。現在、遺跡は5つの地点に区分して台帳登録されているが、これらは弥生時代中期後葉の標式遺跡とされる広義の桜井遺跡に包含される。本調査地点は5地点に区分された桜井遺跡の中では遺跡北東部に展開する桜井■遺跡に該当する。

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地内に幅2m×10mの調査区を2箇所 に設け、遺構・遺物の有無を確認に努めた。表土除去と埋め戻し作業は0.45mの重機を用いたが、それ以外の作業は人力で行った。

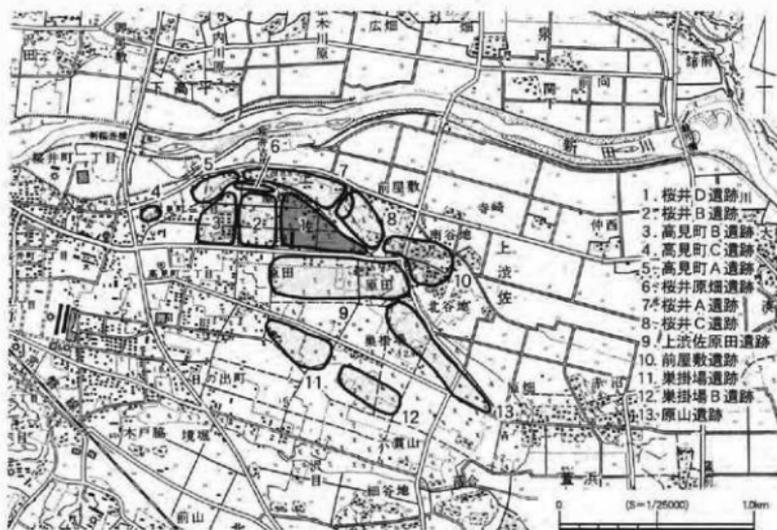


図16 桜井D遺跡位置図

調査記録の作成は、平面図は平板測量を用いて $S = 1/50$ の縮尺で作成した。記録写真は 35mm 判カラーネガフィルム・カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで行った。出土した遺物は、出土地点・遺構・層位・日付等を記録した上で取り上げた。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区上洪佐字原畑
 調査期間 平成17年7月21日～22日
 対象面積 600㎡
 調査面積 40㎡
 調査担当 荒 淑人
 発掘補助員 高井孝子・遠藤紀子・木幡春江・大和田弘・佐藤民子

調査成果

基本土層：調査区内における基本土層は1・2トレンチとも共通しているため、ここでは調査区域内の基本土層を説明する。最も上層に位置する表土層(LⅠ)は厚さ約10cm程度で、現在は畑地耕作土として利用されている。表土の下層には地山の黄色ローム粒を含む、しまりの強い黒褐色土が認められる(LⅡ)。本土層は少量の遺物を含み、層厚は5cm前後である。LⅢは地山相当の黄色ソフトローム層である。遺構はLⅢ上面で確認される。

1T：本調査区は対象区域の東側に調査区の長辺を南北に向けて設定した2m×10mの調査区である。LⅠ・Ⅱを除去し検出されたLⅢには、調査区東壁に沿って長さ6.8m前後に黒色土が広がる。この黒色土が分布する範囲の大部分は調査区の東側に及んでいるため、全体の形状や遺構の性格については不明であるが、遺構の北部付近はやや歪んでいるがほぼ直角に近い角度を有していることから、竪穴住居跡の可能性が高いと見ている(SI1)。本遺構を竪穴住居跡とした場合、確認された範囲では南北規模が7mを超えた大型住居となる。掘り込み内部の堆積土からは内面黒色処理が施された土師器片等が出土した。その他の遺構としては上述のSI1より古い時期の土坑状の掘り込み(SK1・2)と溝跡2条(SD1・2)が確認された。ただし、これらの遺構の大部分は調査区外に延びているため、詳細は不明である。

出土遺物は、LⅠ・Ⅱから縄文土器片・土師器片が出土し、SI1とした遺構からも土師器片が出土したが、図化するまでには至らない。SI1出土の土師器は内面に黒色処理を施したロクロ使用段階の杯で、表杉ノ入式の範疇で捉えられる。

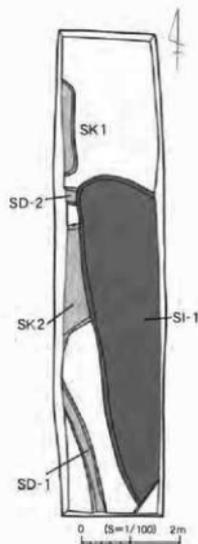


図17 1T平面図

2 T : 2 トレンチは1 トレンチの西側 7m の地点に設けた 2m × 10m の調査区である。地山相当の L III を確認した時点で、調査区を斜めに横断する溝跡を検出した (SD3)。溝跡は幅 15cm ほどと小規模である。長さは総長 9.0m を確認した。溝の性格は不明である。

第5項 調査所見

今回の試掘調査は、調査対象面積 600㎡ のうち調査面積は 40㎡ と、極めて小規模な調査であったが、竪穴住居跡や溝跡の遺構とともに、内面に内黒処理を施した土師器杯片などが確認され、本遺跡の遺構密度が高いことが明らかとなった。出土した土師器杯はロクロ使用段階のもので、概ね表杉ノ入式のものである。検出された遺構についても、重複関係で最も新しい時期の所産と思われる竪穴住居が表杉ノ入式のものであると考えられることから、これに切られる土坑や溝は、それ以前の年代が与えられる。

現在までの南相馬市内において、当該期の集落の調査は単発的に行われているに過ぎず、集落全体を知ることのできる遺跡は極めて希少である。その点からみれば、今回で平安時代の集落を構成する遺構群が確認されたことは、当時期の集落構造を知る上で、貴重な知見が得られたと言える。

このような調査知見から、本調査地点については盛土等の工法対応により遺構を破壊することのない施工が望ましいが、工法対応が困難な場合には発掘調査が必要である。



図18 調査区位置図

第5節 新田原遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の試掘調査は、平成17年6月に提出された、「埋蔵文化財の有無について（照会）」に基づいて、福島県埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査によって、周知の埋蔵文化財包蔵地である「新田原遺跡」が存在していることが確認された。この結果、本開発に際しては試掘調査を実施し、改めて保存協議を必要とする旨の回答を行った。開発計画は埋蔵文化財包蔵地内における携帯電話中継用無線基地の建設であり、平成17年7月21日から調査に着手した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は南相馬市原町区大原字台畑地内に所在する、奈良・平安時代の遺物散布地である。表面採取では土師器が採取されているが、過去の調査歴はなくその詳細は分からない。

遺跡周辺の環境を見ると、遺跡は阿武隈高地の山間部を流れてきた新田川が平野部に到達す

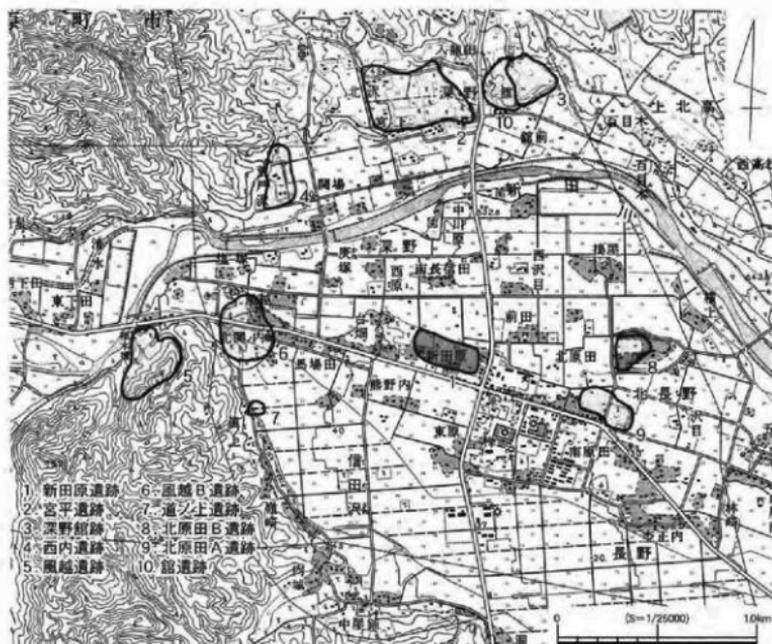


図19 新田原遺跡位置図

る地点に位置し、同河川によって形成された沖積地でも周辺よりやや小高く残された微高地の中央に立地している。周辺で確認されている遺跡を見ると、北原田 A 遺跡・北原田 B 遺跡などの奈良・平安時代の遺物散布地も、本遺跡から東に向かって延びる沖積地内の微高地の上面に立地している。

第3項 調査の方法

調査は、開発計画区内に 2m × 10m のトレンチ 2 本を設け遺構・遺物の確認を行った。表土除去から遺構検出・埋め戻しまでの全ての作業を人力で行った。調査の記録の作成は、調査箇所は地形図の中に調査区を図示し、記録写真は 35mm 判カラーネガフィルム・カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで作成した。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区深野字台畑

調査期間 平成 17 年 7 月 21 日～22 日

対象面積 307㎡

調査面積 40㎡

調査担当 荒 淑人

発掘補助員 青田 栄・小畑哲彦・境 正憲・佐藤美奈子・中島真一

調査成果

1 T : 1 トレンチは対象地西部に設けた 2m × 10m の調査区である。厚さ約 15cm の表土を除去すると、調査区南半では地山相の黄色ロームが現われ、北半には暗褐色土や砂礫層が堆積する。地山ロームは砂礫層との層境で急激に落ち込んでいる様子が認められ、この落ち込みは後世の地山改変に伴うもので、砂礫類は改変以後の盛土であると考えられる。地山面を確認した時点で、当調査区からは遺構・遺物は認められない。



図20 調査区位置図

2 T : 2 トレンチは1 トレンチの東方約 11.0m の地点に設けた 2m × 10m の調査区である。

1 トレンチ同様に、厚さ約 15cm の表土を除去すると、調査区南部約 2/3 の範囲には地山相当の黄色ロームが現われる。ローム面には現代の製炭にかかわる掘り込み・焼土・炭化物などが認められたが、それ以外の遺構・遺物は確認されていない。北側には暗褐色土や砂礫層が堆積するが、1 トレンチ同様に後世の盛土であると考えられる。

第5項 調査所見

本遺跡の調査は、トレンチ2本を設定し遺構・遺物の確認に努めたが、今回の調査区では遺構・遺物を確認することはできなかった。このことは、今回の調査地点を新田原遺跡全体でみた場合、遺跡範囲の北西端に位置することから、遺跡の中心部分は本地点より南側である可能性が高いと想定される。したがって、本地点で計画された土木工事に対する発掘調査の必要性はないと判断されるものの、当該地点は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重な工事施工を要する。

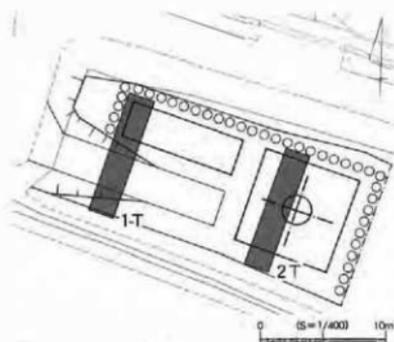


図21 トレンチ配置図

第6節 石住遺跡

第1項 調査に至る経過

本調査は、本遺跡が所在する南相馬市原町区上太田字石積ならびに馬場字石住地内において計画された上太田地区農業基盤整備事業において、本年度施工区の一部が本遺跡にかかる計画であることが判明したため、急遽試掘調査を実施した。

第2項 遺跡概要

本遺跡については平成10年の常磐自動車道計画路線における踏査によって、縄文土器・土師器の散布が認められ、埋蔵文化財包蔵地に登録された。遺跡は河川に沿った東西500m、南北150mの広がりをもつ。

遺跡の立地を見ると市内南側を東流する太田川の上流域に位置し、遺跡の北側には市内西部域で発達した雲雀ヶ原扇状地が広がる。遺跡の南側には阿武隈高地から太平洋に向かう太田川が流れ、さらにその南側には阿武隈高地から派生した低位丘陵が延びている。遺跡は雲雀ヶ原扇状地が太田川の侵食によって形成された河岸段丘の上面にのる。

第3項 調査の方法

本遺跡の調査は、施工区域に2m×10mのトレンチ10本を地形に合わせて配置し、遺構・遺物の確認に努めた。遺構検出面もしくは基盤層を確認するまでの表土ならびに堆積土は0.45㎡の重機を用い、それ以外の作業は人力で行った。調査記録の作成は、35mm判カラーネガフィルム・モノクロネガフィルム・リバーサルフィルムで作成した。



図22 遺跡位置図

第4項 調査要項と成果

調査要項

- 所在地 南相馬市原町区上太田字石積・馬場字石住
調査期間 平成17年10月29日～11月14日
対象面積 14,000㎡
調査面積 180㎡
調査担当 荒 淑人
発掘補助員 生山 繁・生山玲子・江井新英・小川友子・志賀きい子・柴田淳子
松本英俊・水戸田枝子

調査成果

- 1 T：本調査区は丘陵の裾部付近、最上段の水田面に設けた。厚さ15cmの表土を除去すると黒色土を主体とした堆積土が見られる。堆積土には灰白色砂質層を挟みながら6層に細分される。黒色土の下層にはグライ化した砂質層が見られる。調査はグライ化層上面までの約110cmまで掘り進めたが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 2 T：本調査区は1トレンチと同じ水田面に設けた。厚さ約20cmの表土を除去すると、その下層にはマンガン沈着層を含むLⅡが認められる。LⅢの下層には暗灰褐色砂質層が入り、基盤層として判断したLⅤの黄色砂礫層に到達する。基盤層は現地面から90mの地点で確認したが、この面に到達しても遺構・遺物は確認されなかった。
- 3 T：本調査区は1・2トレンチの下段水田に設けたトレンチである。最も上層には厚さ10cm前後の表土があり、その下層には3層に細分される黄色砂質土がある。基盤層は現地表面から約90cmの地点で確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。
- 4 T：本調査区は3トレンチと同水田面に設けたトレンチである。表土を除去すると、その下層には黒色土が堆積する(LⅡ)。黒色土中層には厚さ3cmのマンガン沈着層(LⅡb)が認められ、この面を境に上層をLⅡa、下層をLⅡcとした。LⅡの下層には黒色土に砂礫粒を含むLⅢが入り基盤層に到達する。基盤層は黄褐色砂礫層である。
- 5 T：本調査区は3・4トレンチを設けた水田の下段水田面に設けた。厚さ10cmの表土を除去するとその下層には、厚さ30cmの黒色土が堆積する。黒色土の上面にはマンガン沈着による褐色土をはさむ。黒色土の下層には黄色砂質層が厚く堆積する。砂質層は厚さ180cmまでを確認し、その下層には基盤層の砂礫層が位置する。遺構・遺物は認められない。
- 6 T：本調査区は中段の水田面の中央部に設けたトレンチである。基盤層として判断した面は黄色砂もしくは赤褐色砂質層であり、深さ110cmの地点で確認した。堆積層は6層に分けたが、最終的にはLⅡは4層、L6は2層に細分された。遺構・遺物は確認されなかった。
- 7 T：本調査区は6トレンチの南西方向に設けた調査区である。堆積土を除去した時点で確認した基盤層は現表土面から深さ約70cmの地点である。堆積土は4層に区分される。堆積土の大部分は黒色土であり、層の乱れは認められない。遺構・遺物も確認されなかった。

- 8 T : 本調査区は3・6トレンチと同一標高の水田面に設けた調査区である。表土・堆積土等を除去し基盤層の確認に努めたが、深さ約100cmの地点で湧水が始まり、調査を断念した。
- 9 T : 本調査区は、8トレンチと10トレンチと同様の標高面に位置する水田面に設けた調査区である。地山と判断した黄色砂質層を確認するまでの深さは約90cmである。堆積層は5層を確認した。上位の3層は黒色土を主とし、下位の2層は暗黄褐色砂質層である。調査では表土直下のLⅡから縄文土器片1点が出土した以外には、遺構・遺物は確認されなかった。
- 10 T : 本調査区は本年度の対象区域の最も西側に設けたトレンチである。深さ約70cmの堆積土を除去すると基盤層として判断した暗黄色砂質層に到達する。堆積土は3層に分層され上位2層は黒色土、最下層は暗黄色砂質層である。遺構・遺物は認められない。

第5項 調査所見

本年度の石住遺跡の試掘調査では、施工区域内に10本のトレンチを設けて遺構・遺物の確認を行ったが、いずれのトレンチを見ても遺構・遺物は確認されなかったため、本調査の必要はないと判断する。ただし、本遺跡の西側については、試掘調査を実施してはいたため、この範囲における工事については、改めて試掘調査と保存協議が必要である。

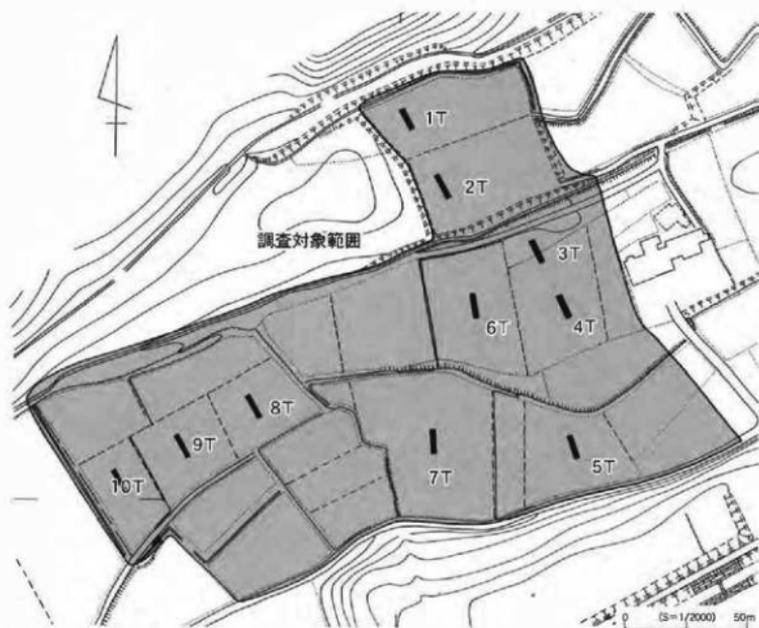


図23 石住遺跡トレンチ配置図

第7節 追合B遺跡

第1項 調査に至る経過

平成17年3月22日、開発事業者から市教育委員会教育長宛て埋蔵文化財の有無について照会があった。照会場所は市町村合併前の原町市金沢字追合及び物見山一帯で、開発の目的は造成用の土砂採取であり、その面積は43,100㎡であった。市教育委員会は、埋蔵文化財包蔵地台帳と照合の結果、当該開発計画予定地に周知の埋蔵文化財包蔵地である追合B遺跡の所在を確認した。しかし、照会時期が年度末であり、試掘調査が次年度の調査予定に含まれておらず、かつ開発面積が広大であったため、事業者に対し、試掘調査を必要とすること、さらに調査時期については調整を要することを同日付け回答した。

その後市教育委員会は試掘調査時期、調査体制及び調査経費について検討し、調査体制の不足は調査員の派遣委託により補うこととした。試掘対象面積は、開発予定面積から既開発部分を除いた約40,000㎡とした。

第2項 遺跡概要

本遺跡は阿武隈高地から太平洋に向かって樹枝状に派生した低位丘陵上に立地し、標高は約20～47mを測る。遺跡は平成4年5月、照会場所から西側の土砂採取地で弥生土器、須恵器円面硯などが採取されたため、弥生時代、奈良・平安時代の散布地として地形を考慮して約450m四方の範囲が埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されることとなった。

遺跡の一部は平成8年4月に簡易宿泊施設の造成に伴い試掘調査され、鉄滓などが出土し古代の製鉄遺跡も所在することが確認された。

周辺の遺跡も古代の製鉄遺跡が多く、同一丘陵の東側1kmには古代の製鉄遺跡としては全国最大規模の金沢地区製鉄遺跡群、西側2kmには割田地区製鉄遺跡群が所在している。



図24 追合B遺跡位置図

第3項 調査の方法

調査対象地は全体が山林であるため、はじめに地形観察及び試掘トレンチ設定のためブッシュや細い雑木の刈り払いを行った。トレンチは幅2×長さ10mを基本としたが山林の間に設定したこともあり、これに満たないものも多かった。表土掘削及び埋め戻しは可能な限り重機を用いた。遺構の精査は原則的に検出面にとどめたが弥生土器の埋設遺構については完掘し遺物を取り上げた。

トレンチは84箇所を掘削し、トレンチの大きさ、基本土層、遺構・遺物の有無などを記載したトレンチカードを作成した。トレンチの位置は1/2500の地形図におおよその位置と方向を図示した。記録写真は35mm判カラーネガフィルムで行った。

第4項 調査要項

所在地 南相馬市原町区金沢字追合地内
調査期間 平成17年10月24日～11月30日
対象面積 40,000㎡
調査面積 1,596㎡
調査担当 堀 耕平
調査員 中山雅弘・鈴木隆康・猪狩みち子（財）いわき市教育文化事業団
発掘補助員 松本富雄、荒 福夫、牛来哲男、西山美紀子、新川和子、木幡由起枝、
 岩崎晴美、渡部啓子、遠藤忠臣、番場容平、渡部広子、稲月浪子、稲月昭博、
 鈴木時江、鈴木令子、益山富士子、斉藤光男、田中裕史、佐藤美奈子、
 荒 洋子、伊佐見真知子
調査協力者 加工建材工業株式会社、星 巖

第5項 調査成果

84箇所のトレンチ（略号T）のうち、48箇所から遺構が検出された。種類としては、竪穴住居跡、製鉄炉跡・鹿滓場、土坑、溝跡などがある。遺物は弥生土器（埋設土器2基を含む）、石器、土師器、須恵器、羽口、鉄滓が平箱で7箱である。以下、時代別に概述する。

弥生時代

竪穴住居跡（2棟）：22 T・32 Tから検出された。いずれも弥生時代中期の住居跡である。椀井式土器と石器（石廬丁・石斧など）を出土する。
 埋設土器遺構（2基）：33 T・60 Tから検出された。土器棺墓と想定できる遺構である。いずれも弥生時代中期の遺構である。
 遺物包含層（6箇所）：32 T・33 T・35 T・38 T・60 T・61 Tの6箇所。いずれも弥生時代中期の土器を包含する。

古代（奈良・平安時代）

竪穴住居跡（1棟）：46 Tから検出された。東力マドをもち土師器を出土する。
 製鉄炉跡（6基）：41 T・42 T・43 T・45 Tから検出された。

廃滓場（1箇所）：55 Tから単独で検出された。

焼成土坑（4基）：2 T・4 T・65 Tから検出された。壁面が強く酸化している。製鉄関連の木炭焼成土坑であろう。

遺物包含層（10箇所）：54 T・58 T・62 T・63 T・75 T・77 T・79 T・80 T・81 T・82 Tから検出された。81 Tと82 Tは2面確認された。各トレンチからは弥生土器・須恵器・鉄滓・羽口などが出土している。

上記のほか時代を明確にはできないが、土坑20基、溝跡11条、畝状遺構2基などがある。

第6項 調査所見

試掘調査の結果、本遺跡が弥生時代中期の集落・墓域・包含層、奈良・平安時代の大規模な製鉄関連遺跡であることが確認された。弥生時代の集落と墓域は丘陵頂部（31・32 T）や先端部（60 T）などに偏在し、遺物包含層は丘陵斜面から確認されるという特徴がある。製鉄炉跡・廃滓場はいずれも丘陵南斜面から検出されており、遺跡の立地において近隣の製鉄遺跡と共通性が認められる。製鉄炉跡は等高線に直交し小型で瓢箪型の平面形を呈するもので、当地方でも珍しいタイプであり注目される。

以上から、遺構・遺物の分布状況は、場所により密度に差があるが、全体として調査区域全域から検出されているため、開発に際しては発掘調査が必要であると判断される。

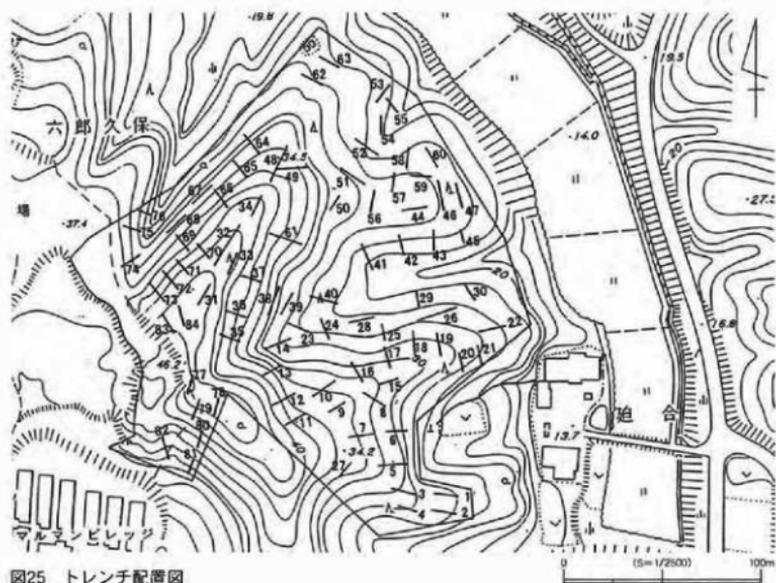


図25 トレンチ配置図

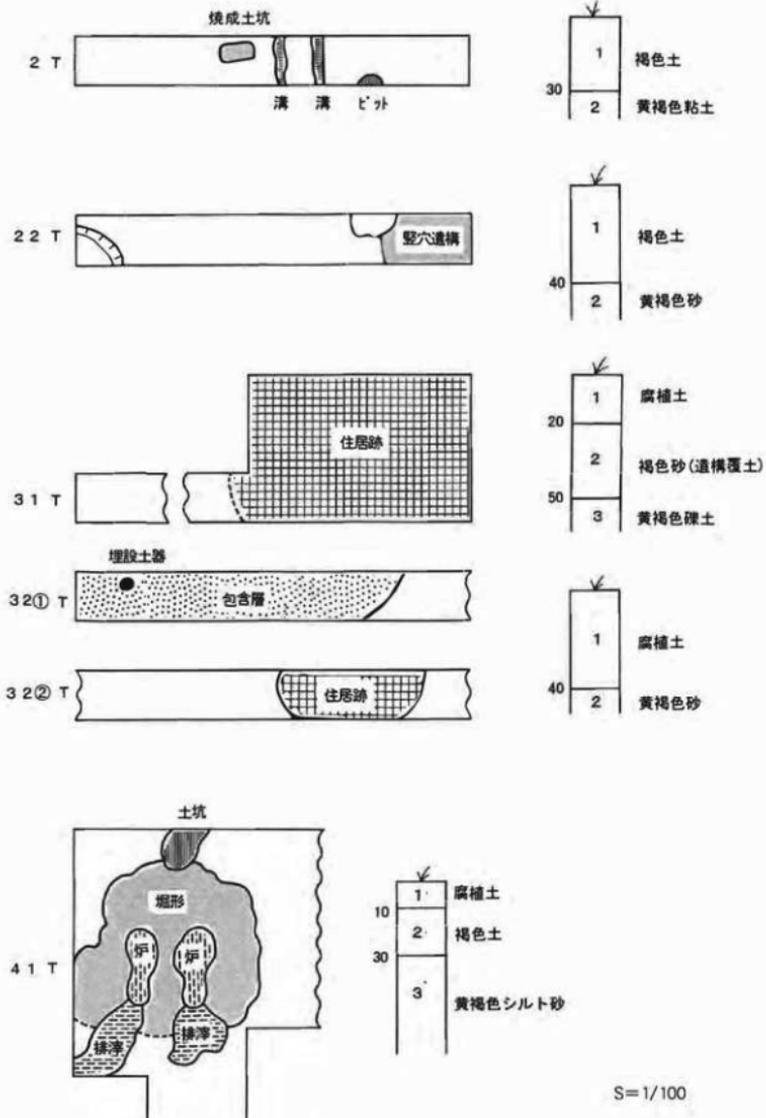


図26 検出遺構平面図(1)

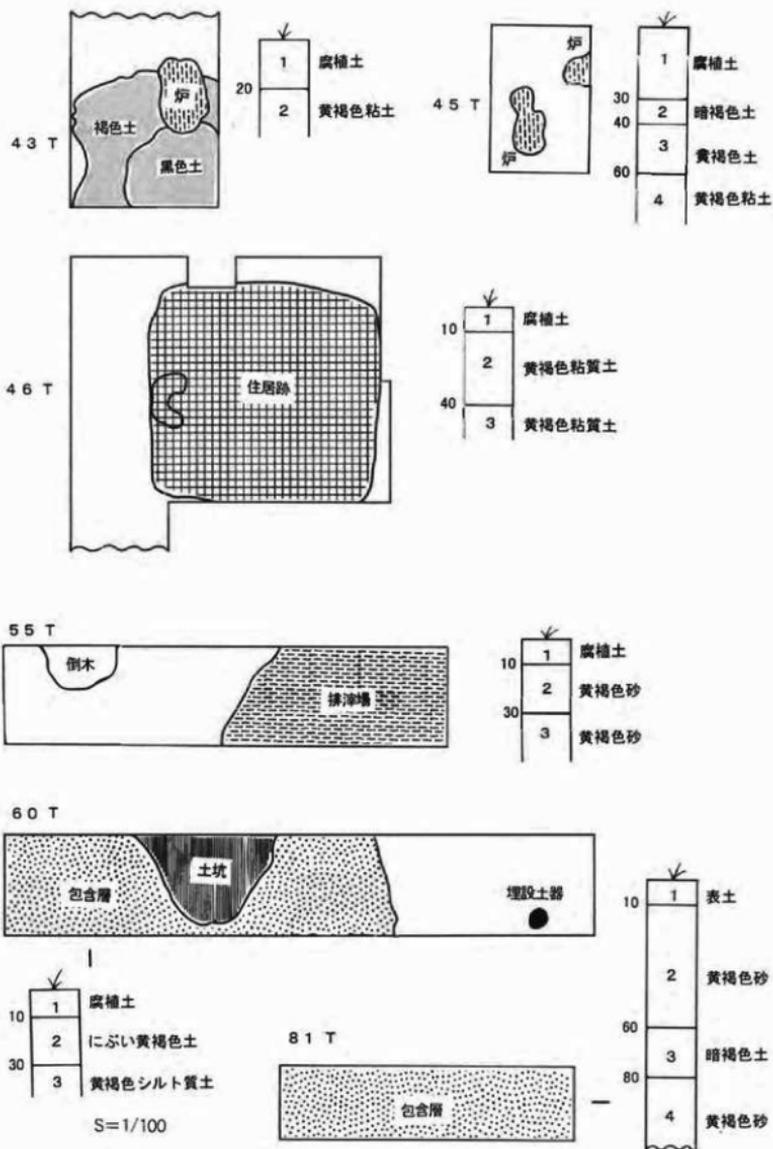


図27 検出遺構平面図 (2)

第8節 京塚沢B遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は平成17年5月に提出された山砂採取にともなう「埋蔵文化財の有無について」照会に基づいて、福島県埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査の結果、本開発計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である京塚沢B遺跡内に位置していることが確認された。

このため、本地区における開発計画については事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物の確認が必要であることを回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は阿武隈高地から太平洋に向かって樹枝状に派生した低位丘陵斜面に立地し、丘陵が終了する東側約800mには太平洋が迫っている。遺跡の乗る丘陵の北側には新田川によって形成された広大な沖積地が広がる。反対に丘陵南側には太田川によって形成された沖積地が展開し、丘陵山裾にはその支流である鶴江川が流れる。

遺跡は丘陵の西側斜面の東西約110m、南北約160mに展開すると想定される。遺跡内では切り通し面で木炭窯跡と想定される焼土層の広がり認められており、製鉄・製炭等の生産活動にかかる遺跡の可能性があると考えられている。

周辺には泉鹿寺跡で出土する瓦群や須恵器を生産したと考えられる京塚沢瓦窯跡群（A・B）、京塚沢C遺跡が点在する一方で、弥生時代の遺物散布地である上作田遺跡も確認される。



図28 京塚沢B遺跡位置図

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地内に幅2m×10mの基本トレンチを地形に合わせて17本を配置し、遺構・遺物の有無を確認した。表土除去と埋め戻し作業は0.25㎡の重機を、それ以外の作業は人力で行った。調査記録の作成は、調査箇所は地形図の中に調査区を図示し、記録写真は35mm判カラーネガフィルムで行った。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区雫字京塚沢
 調査期間 平成17年10月17日～21日
 対象面積 10,134㎡（うち2,283㎡は既掘削）
 調査面積 364㎡
 調査担当 齋藤直之
 発掘補助員 荒 洋子・佐藤美奈子・中島真一

調査成果

1～6 T:1～6 トレンチは調査区
 南西斜面に設けた調査区である。
 南北10m×東西2mのトレンチの
 長辺を南北に向けて設定した。調
 査区内で確認した基本土層は、L
 I：表土・L II：茶褐色粘質土で
 ある。黄褐色ローム層が確認され
 る約50cmまで掘り下げたが遺
 構・遺物は確認されなかった。

7～17 T:7～17 トレンチは調査区
 北西斜面に設けた調査区である。
 長さ10m×幅2mの東西方向のト
 レンチである。調査区内で確認し
 た基本土層は、L I：表土・L II：黄褐色粘質土である。黄褐色ローム層が確認される約30～140cmまで掘り下げたが遺構・遺物は確認されなかった。



図29 調査区位置図

第5項 調査所見

本遺跡は奈良・平安時代の製鉄遺跡として登録されているが、今回の試掘調査では遺跡の内容を明らかにするような知見を得ることはできなかったため、京塚沢B遺跡の中心は今回の調査区の東及び北に展開するものと判断される。従って、本遺跡内における諸開発行為において

は今回の調査対象より東及び北側部分で注意を払う必要がある。

なお、今回の開発計画に際しては発掘調査の必要はないと判断されるが、工事の施工に際しては慎重な工事を要する。



図30 トレンチ配置図

第9節 上洪佐原田遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、平成17年11月に提出された埋蔵文化財包蔵地隣接地における携帯電話中継無線基地の建設ともなう「埋蔵文化財の有無について」の提出に基づいて、福島県埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査の結果、本開発計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である上洪佐原田遺跡に接していることが確認された。このため、本地区における開発計画については事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物の確認が必要であると回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は新田川下流域の河岸段丘上面に立地する、平安時代の遺物散布地である。

近接範囲には高見町A遺跡・高見町B遺跡・広義の桜井遺跡・桜井荒屋敷遺跡・桜井古墳群上洪佐支群などが所在する。いずれの遺跡も、弥生時代から古墳時代を中心とした時期の遺跡であり、部分的に奈良・平安時代の遺物も採取されている。

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地内中央に幅2m×10mの調査区を1箇所設け、遺構・遺物の有無を確認した。表土除去と埋め戻し作業は0.25m³の重機を用い、それ以外の作業は人力で行った。

調査の記録の作成は、調査箇所は地形図の中に調査区を図示し、記録写真は35mm判カラーネガフィルムで行った。



図31 上洪佐原田遺跡位置図



図32 調査区位置図

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区上流佐字原地内

調査期間 平成17年11月16日～25日

対象面積 271㎡

調査面積 20㎡

調査担当 齋藤直之

調査成果

1T:1Tは開発計画地内中央に設けた調査区である。東西10m×南北2mのトレンチの長辺を東西に向けて設定した。本調査地点では4面の基本土層を確認した。最上層に位置するLⅠは盛土層である。約60cmの厚さを平均とし、黄褐色砂質土及び黄褐色粘質土である。LⅡは厚さ約35cmの耕作土層(旧畑)である。LⅢは茶褐色土・黒褐色土の混合土(しまり良・粘性強)で厚さは約20cmであった。LⅣは茶褐色土・黒褐色土の混合土(しまり良・粘性強)で厚さは約20cmであった。黄褐色ローム層が確認された約140cmまで掘り下げたが遺構・遺物は確認されなかった。

第5項 調査所見

上述の調査成果から、本地区における本調査の必要性はないと判断される。



図33 トレンチ配置図

第10節 泉 館 跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡とその北側隣接地約280,000㎡は大半が東北電力㈱から寄付された土地であるが、うち約6haはグリーンパークなる名称でテニスコート、ゲートボール場などのスポーツ施設として市民に開放されている。旧原町市では当該地の再整備が計画されたが、南相馬市において整備計画と館跡の保護保存について調整を図る必要性が生じていた。

一方、平成18年1月1日に合併する以前の原町市では、平成14年度から平成24年度まで、10巻11冊の『原町市史』の編さん事業を進めており、合併後においても事業を継続して行うこととなった。このうち埋蔵文化財と関係が深い考古資料編の平成21年度刊行に向けて、考古部会の専門委員を中心に重要遺跡や城館跡の分布調査を平成17年度から実施することとなった。埋蔵文化財を所管する南相馬市教育委員会文化課では市史の刊行という目的と合わせて、埋蔵文化財情報の把握という観点から、市史編さん室と共同で分布調査を実施することとした。

以上のような状況の中、本館跡については先ず現地調査を行い縄張り図を作成することとなった。

第2項 遺跡概要

本遺跡は阿武隈高地から太平洋に向かって派生した低位丘陵の東端部、海岸線までは400mの丘陵頂部に立地し、南側に原町区の主要河川である新田川を望んでいる。標高は約20～50mを測る。幕末に編さんされた奥州中村藩の地誌『奥相志』には、その規模「高さ5丈余、東西50間、南北30間」で、元亨3年(1323)に泉宮内太夫胤安が相馬重胤に従って下総から来て以後累代にわたり居館したことが記されている。その後慶長2年(1597)に泉藤右衛門胤政は牛越城築城に際し問題を起し、泉館に火を放ち会津の上杉景勝の家臣となったため、本遺跡は館主不在となった。



図34 泉館跡位置図

泉氏は相馬領行方郡中ノ郷において郷士130騎の隊長にして陪従25騎を率い、文禄年間(1592～1596)その領地は301貫780文を有していたことから、泉館は要衝の地を統治する重要な役割を担っていたと考えられる。

泉館跡は昭和48年6月1日に面積21,749㎡が市史跡に指定された。昭和61年には福島県中世城館遺跡総合調査が行われた際、今村昭司氏により郭、腰郭、虎口、のろし台の遺構が確認され、略式ながら縄張り図が作成されている。平成15年度には館跡南側足下の畑で試掘調査が実施され、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡と中世以降と考えられる方形区画溝跡や井戸跡が確認されているが、これまで館跡本体の発掘調査の実績はない。

第3項 調査の方法

調査は、市指定の範囲である館跡本体の縄張り図を作成するため、現地での表面調査を実施した。表面調査に先立ち地形の観察ができるよう山林の下刈りを行った。

第4項 調査要項

所在地 南相馬市原町区泉字館前地内

調査期間 平成17年12月12日

調査面積 約22,000㎡

調査担当 堀 耕平、伊藤由美子・野沢陽平(原町区地域生涯学習課市史編さん係)

調査員 松岡 道

第5項 調査成果

かつての開墾によってかなり改变されているが、頂部を占める主郭アの周囲には点々と土塁が残り、雷神社の傍らに櫓台とも見られる大きな高まりイがある。東側は土塁直下が堀切ウとなっているが、その外の台形の高まりエは城外ではなく、防衛に活用しようとして、北裾にさらに土塁を設けている。従って、エは尾根続きに対する堡壘として評価することが可能である。西側は一段腰曲輪を構えた後、オで大きく落ち込んでおり、対岸がわずかながら高まっていること、オの南側斜面に竪堀状の削った痕跡が認められることから、堀切と判断した。

以上のように、全体の規模は大きくないが、深く掘り込んだ堀切と堡壘で防御を固めたプランは、通常いわれるような意味での「居館」とはかなり異質である。開墾で不明瞭なため断定に至らないが、主郭には動線が内部で折れる形態の虎口があった可能性もある。鹿島方面に対する防衛の機能が強く表出していると考えられる。(松岡 道)

第6項 調査所見

今回の表面調査により、より詳細な縄張り図の作成ができたが、遺跡範囲、遺存状況及び遺構の内容については確証を得られなかった部分も大きい。今後、保護保存あるいは開発に対する遺跡の取り扱いを考える上で試掘調査等によりさらに詳細な情報の把握に努める必要がある。

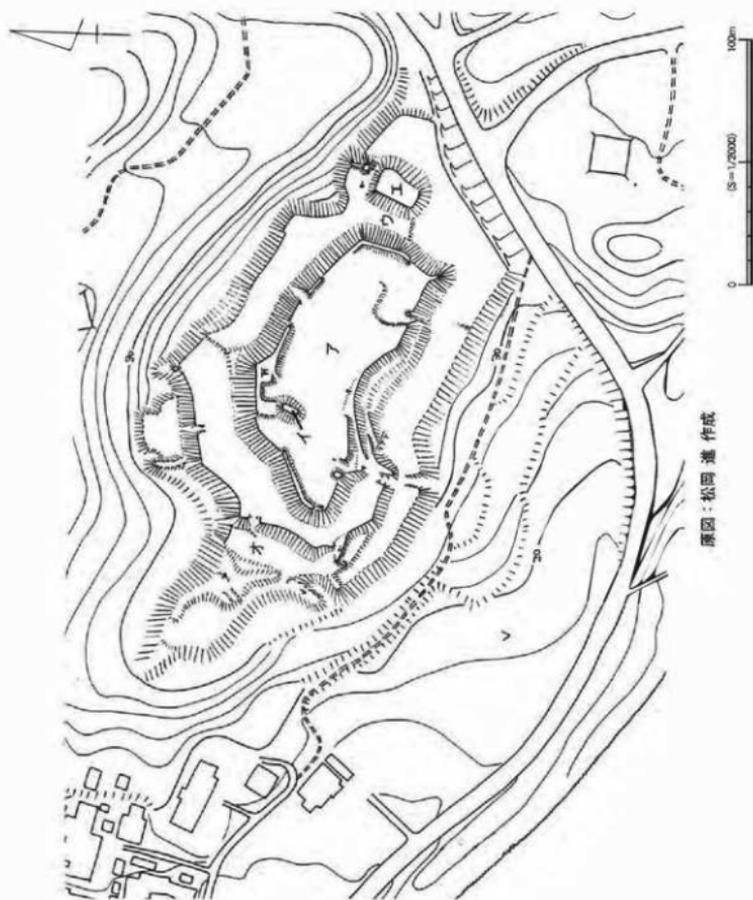


図35 泉館跡縄張り図

第11節 京塚沢瓦窯跡B

第1項 調査に至る経過

市内遺跡の分布調査を実施するに至る経過については第10節で記述した。本遺跡は古代の瓦窯跡として重要遺跡に位置づけられているものの、その内容については詳細な情報がないことから、今後の保護保存や開発に対する取り扱いの方針を検討するため分布調査を実施することとした。

第2項 遺跡概要

本遺跡は阿武隈高地から太平洋に向かって派生した低位丘陵上に立地し、標高は約20～44mを測る。昭和59年3月作成の台帳には、昭和41年11月、山林を整地した際、布目瓦、須恵器片と共に窯跡2基を確認したことが記載され、その範囲として南北幅50m、東西の長さ300mが示されたが、その後平成6年10月には地形を考慮して約450m四方に範囲が増補された。

また、本遺跡は北側4.5kmに位置している古代陸奥国行方郡家に想定される泉庵寺跡に瓦を供給した遺跡と考えられているが発掘調査の実績はない。

このほか、本遺跡の北東部分には範囲が重複して古代の製鉄遺跡である京塚沢F遺跡が所在しており、本遺跡にも同時代の遺構が分布している可能性が高いと想定された。

第3項 調査の方法

調査は、遺跡範囲とその外側を含めた約500m四方の範囲について地表の観察から遺構や遺物の有無を確認する表面調査により行った。遺跡が古代の瓦窯跡あるいは製鉄遺跡であることから、瓦窯跡、木炭窯跡や竪穴住居跡の窺みあるいは廃滓場の高まりの有無について地表の観察と鉄滓等の遺物の採集に努めた。

第4項 調査要項

所在地 南相馬市原町区雫字京塚沢地内

調査期間 平成18年1月21日～1月22日

調査面積 約19,000㎡

調査担当 堀 耕平、二谷 眞・齋藤直之・伊藤由美子（原町区地域生涯学習課市史編さん係）

調査員 玉川一郎、藤原妃敏、森 幸彦、安田 稔、飯村 均、小野田義和



図36 京塚沢瓦窯跡B位置図

第5項 調査成果

従前瓦窯跡断面として知られていた2箇所に加え、新たに鉄滓や羽口の散布地を7箇所確認した。採集遺物は鉄滓と羽口で平箱1箱である。

散布地は市内の低位丘陵に分布している製鉄遺跡と同様、古代の鉄生産に関わる製鉄炉の廃滓場と推定することができ、周辺には関連遺構として製鉄炉のほかにも竪穴住居跡、木炭窯跡、土坑などの遺構の存在が想定できる。7箇所のうち3箇所は周知の遺跡の範囲内であったが、残る4箇所はその範囲外に所在が確認された。

第6項 調査所見

これまで古代の瓦窯跡として知られていた本遺跡であるが、今回の表面調査により、同時代の製鉄遺跡でもあることが確認され、その範囲はさらに広がることが判明した。しかし、これら遺構の遺存状況や瓦窯跡についての具体的な分布状況については情報を得ることはできなかった。今後は古代陸奥国行方郡家に想定される泉庵寺跡に瓦を供給した遺跡としての保存のあり方とともに開発に対する製鉄遺跡としての取り扱いを考える上で試掘調査等によりさらに詳細な情報の把握に努める必要がある。

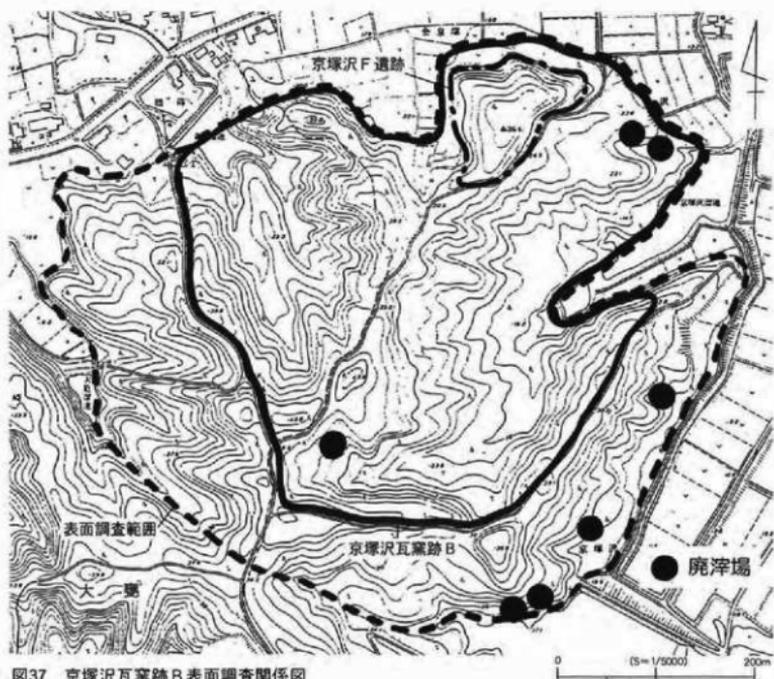


図37 京塚沢瓦窯跡B表面調査関係図

第12節 与太郎内古墳群 (5・6次調査)

第1項 調査に至る経過

与太郎内古墳群は浜通り地方を代表する前方後円墳であるにもかかわらず、現在の研究水準を満たす詳細測量図がなかった。従って、本古墳群の内容について不明な状態が続いており、古墳群に対してその評価が与えられない状況にあった。

このような状況をみた東北学院大学文学部史学科辻ゼミナールは、改めて本古墳群の測量図を作成し、古墳群の実態を解明するための調査を計画した。

調査は墳丘測量調査から着手され、平成15年からの墳丘構造を確認するための範囲確認調査は原町市教育委員会との合同調査という形で実施された。3次調査では1号墳の後円部墳頂平坦面と前方部が調査され、4次調査では1号墳後円部北斜面とくびれ部の2地点、2号墳後円部の構造解明を目的に2地点で調査が行われた。

ここまでの調査において、1号墳では後円部墳丘内では埋葬施設が確認されず、過去の調査結果が改めて検証された。墳丘構造については過去の調査における調査区ならびに排出土の影響により、確実な墳丘斜面を確認できた地点は少なく、古墳全体から見た墳丘構造の解明が今後の課題として残された。

今回報告する5・6次調査は、調査課題として残された1号墳の墳丘主軸長の確定、後円部北側斜面にある遺構の解明、2号墳の墳丘規模・構造解明を主な調査目的とした。

第2項 遺跡概要

与太郎内古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地として、前方後円墳2基と円墳1基の合計3基の古墳が登録されている。古墳群は阿武隈高地から太平洋に向かって緩やかに蛇行しながら東流する太田川北岸に立地し、北側には福島県東部を縦断する阿武隈高地から太平洋に向かって発達した樹枝状の低位丘陵が展開する。南側には太田川によって形成された沖積地が広がり、古墳群はこの低位丘陵と沖積地の間に取り残された馬背状に発達した微高地の上面にある。

古墳群は、この馬背状の微高地の尾根筋に添った東西80mの範囲に所在する。古墳群の中



図38 与太郎内古墳群位置図

央には後円部を東に向けた1号墳が位置する。墳丘主軸方位は $N107^{\circ}E$ を指し、墳丘主軸長は39mを計測する。1号墳の南東方向約30mの地点には、墳丘主軸長23mの小型前方後円墳である2号墳が位置する。後円部は北東を向き、墳丘主軸方位は $N53^{\circ}E$ を指す。3号墳は1号墳の西方約45mの地点に位置する円墳である。測量調査等は行われていないため、詳細な計測値は提示できないが、墳丘直径は15m程であると推測される。

本古墳については、昭和42年に原町市教育委員会によって発掘調査が実施されている。この時点の調査は1号墳と2号墳の墳丘測量図の作成と、主墳と考えられる1号墳の埋葬施設を探索することに主眼が置かれたものと推測され、後円部と前方部の両墳頂平坦面を中心に調査区が設定された。特に後円部の調査は徹底的で、十字に設けられたトレンチとその間の補足的な調査区により、後円部墳頂平坦面の大部分が調査された。この時点の調査では後円部と前方部の両墳丘で人為的な盛土は見られたものの、明らかな埋葬施設や出土遺物は認識されずに調査は終了されている。また、調査の際に排出された土の一部は墳丘のいたるところに取り残されており、現況では墳丘形状を語る状況にはない。

第3項 調査の方法

調査は古墳群全体に設定されたトラバース配置を考慮して調査区を設けた。1号墳の調査区は、昭和42年の1次調査時の後円部A・Bトレンチを1・2トレンチ、前方部墳頂平坦面に設けられた3トレンチとし、これらの調査区の再調査によって過去の調査状況の復元、把握をおこなった。4トレンチ以降は今回の調査にあわせて設定したトレンチであり、4トレンチは後円部北東斜面、5トレンチは後円部北斜面くびれ部側、6トレンチは後円部先端の墳丘主軸線に沿う調査区である。7トレンチを後円部と前方部が接するくびれ部の墳頂平坦面に設けた。本年度は4次調査の継続調査となる5～7トレンチで調査を実施した。

2号墳は墳丘を8分割して調査区を設定した。墳丘主軸線を境に西側後円部から1～4区、東側後円部から5～8区に区分した。5次調査では後円部2・5区を調査し、本年度は3区を2分割した3A区と4区で行った。3A区は後円部でもくびれ部に近づいた付近に位置し、4区は前方部西側前端を含む範囲である。

調査は表土除去から墳丘面確認にかかる精査作業の全てを人力によって行なった。



図39 古墳群位置図

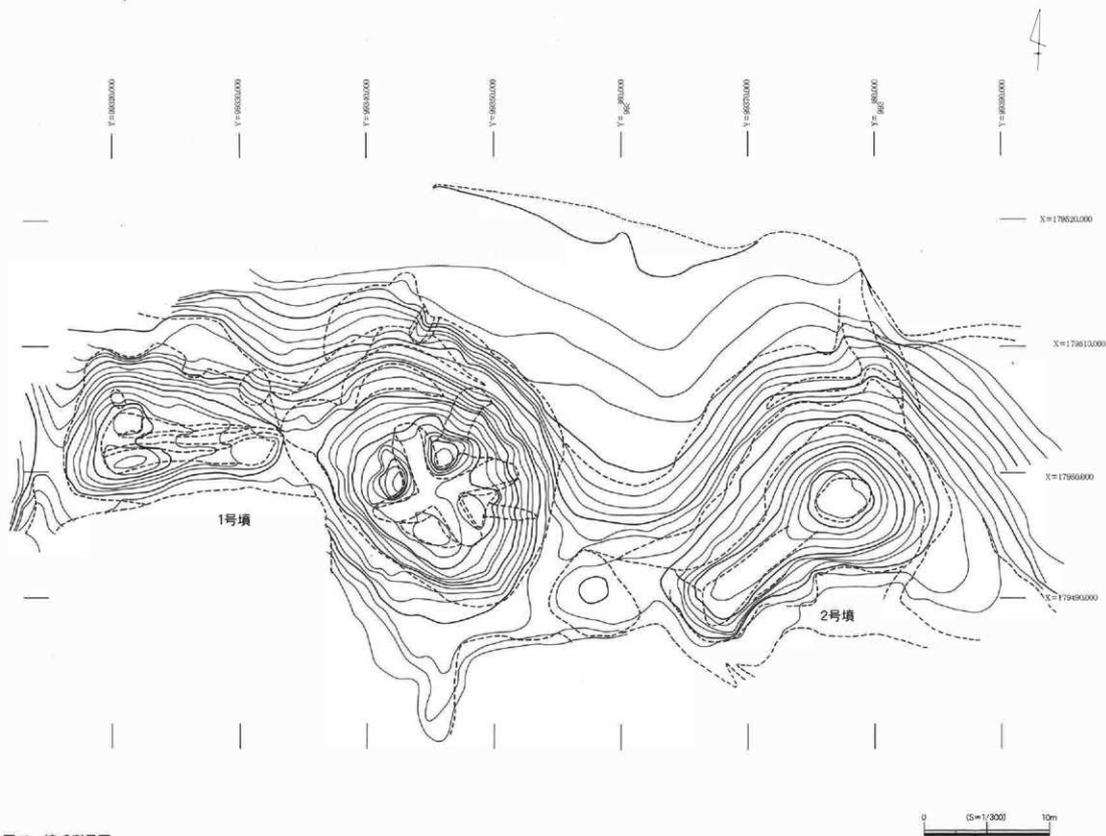


図40 墳丘測量図

調査の記録作成は、平面図ならびに土層断面図は $S = 1/20$ で作成し、平面図は測量トラバースを基準に平板測量で行なった。図化にあたっては、遺構の傾斜変換線、土層変換線とともに10cm 間隔の等高線で墳丘を表現した。

記録写真は35mm判カラーネガフィルム・モノクロネガフィルム・リバーサルフィルムを基本としながら、プローニー判のカラーネガフィルム・モノクロネガフィルム・リバーサルフィルム、そしてデジタルカメラで作成した。

出土した遺物は、調査区・層位・出土座標値・標高・日付を記録した上で取り上げた。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市原町区中太田字与太郎内

調査期間 平成17年8月1日～平成18年3月21日

対象面積 2,800㎡

調査面積 125㎡

調査担当 東北学院大学文学部歴史学科 教授 辻 秀人

南相馬市教育委員会 荒 淑人

調査参加者 宮沢貴信・百々千鶴・大久保弥生・田中美穂・淡木良剛・藤本玲子・相澤達也・浅沼のぞみ・大久保弥生・佐藤佳奈・佐藤祥竹・竹中義寿・三上和仁・菅原徹也・小林三奈子・伊藤静香・小笠原望・竹内美里・荒井優作・嘉瀬尚之・佐藤綾希子・佐藤郷子・佐藤みなみ・菅原徹也・鈴木 直・高橋英谷・関光太郎・堀内悦史・小野麻美・工藤真子・酒井智子・佐々木洸・佐藤裕平・須藤良介・相馬桃子・高橋玲子・高橋憲一・那須恵三・西出 薫・古内恵理子・堀 佑貴・本多祥子・山本一樹・高橋一樹

調査成果

1号墳(図40・41)

1号墳は墳丘主軸長39mを計測する群内最大規模の前方後円墳である。前方部を西に向け、墳丘主軸は丘陵の尾根筋に沿うように置いている。墳丘は微高地状のやせ尾根北側斜面に寄せるように築造されている。前方部は尾根筋に置き、また尾根を切断することで前端を築いている。一方、後円部は尾根筋を外れた位置にあり、大部分は尾根の斜面にある。従って、後円部の平面形は北側に長い楕円形

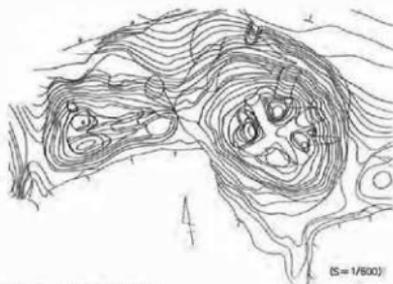


図41 1号墳測量図

を呈している。

これまでの調査で明らかとなっている墳丘構造は、墳丘の下半部は地山を削り出しによって成形され、上半部は積み土によって築かれている。墳丘北側の中段にはテラス状の平坦面がめぐる。裾まわりには浅い皿状の窪みがあるが、周溝と位置づけるには疑問が残り、くびれ部北側付近では地山掘削による墳丘裾部が墳丘外へ延びていく様子が認められている。後円部ならば前方部では、埋葬にかかる痕跡は認められていない。

基本土層

1号墳の基本土層について記述する。表土(L I)を除去すると多量の黄色ロームを不規則に含む暗褐色土が見られる(L II)。L IIは表土直下に位置し、堆積状況も自然堆積状況を示さないことから1次調査時の排出土と考えられる。L IIの下層には暗褐色を主体とする薄い堆積土が見られる。L II発生時の表土である(L III)。L IVは墳丘の崩壊にともなう流出土である。後円部上位に比べて下位側に厚く堆積し、墳丘斜面全体を覆う。L Vからは墳丘構築土である。L Vは積土、L VIは墳丘構築時の旧表土、L VIIは地山である。

5 トレンチ (図 42. 図版 16)

5 トレンチは後円部北側からくびれ部に向かった地点に設けた調査区である。本調査区は東西7.0m×南北8.5mの不整形なL字形を呈し、調査区の規模は45m²である。調査区中心で測る座標値は $X=179513.000$ ・ $Y=99343.000$ である。

この付近の調査を開始する以前の状況は、標高30.0m～32.0mにかけて瘤状に盛り上がった地形の変化が認められ、本来の墳丘形状を観察することはできない状態であった。また3次調査時に実施した地中レーダー探査では、地山形状に異常点が認められている。

今回の調査目的は5次調査で確認された楕円形に広がる陥没状痕跡の解明である。調査は土嚢で保護した遺構面の復元から開始し、遺構の平面形の確定と堆積土の層序確定を行った。検討の結果、陥没痕跡ととらえられたプランは、後円部に向かって弧を描く溝状の遺構であると認識された(SD1)。

5 トレンチで認識された墳丘構造について、後円部上位側から説明する。調査区内の最高等高線は31.5mにあるが、この地点では既に墳丘積土による墳丘斜面内に位置している。墳丘斜面は27°の傾斜角度を保持したまま標高30.0m地点まで降るが、この傾斜変換線を境に墳丘斜面度は6°と緩くなり、幅2.4m程度の平坦面を形成する。平坦面は後円部の形状に合わせて後円部前端からくびれ部に向かって伸びる。平坦面が終了する29.3m地点を過ぎると再び墳丘斜面が始まり27.9mの墳丘端部に到達して終了する。

SD1は調査区南辺西寄りから緩やかに弧を描いて、調査区中央やや北側まで延びている。溝は上端幅1.5mを計測し、断面は半月形を呈する。遺構内の堆積土は墳丘崩壊にともなう流出土が堆積し、その後に黒褐色を主体とした自然堆積土が堆積する。溝の堆積土からは須恵器片が出土した。出土した須恵器片は器種ならびに年代を特定できるものはない。

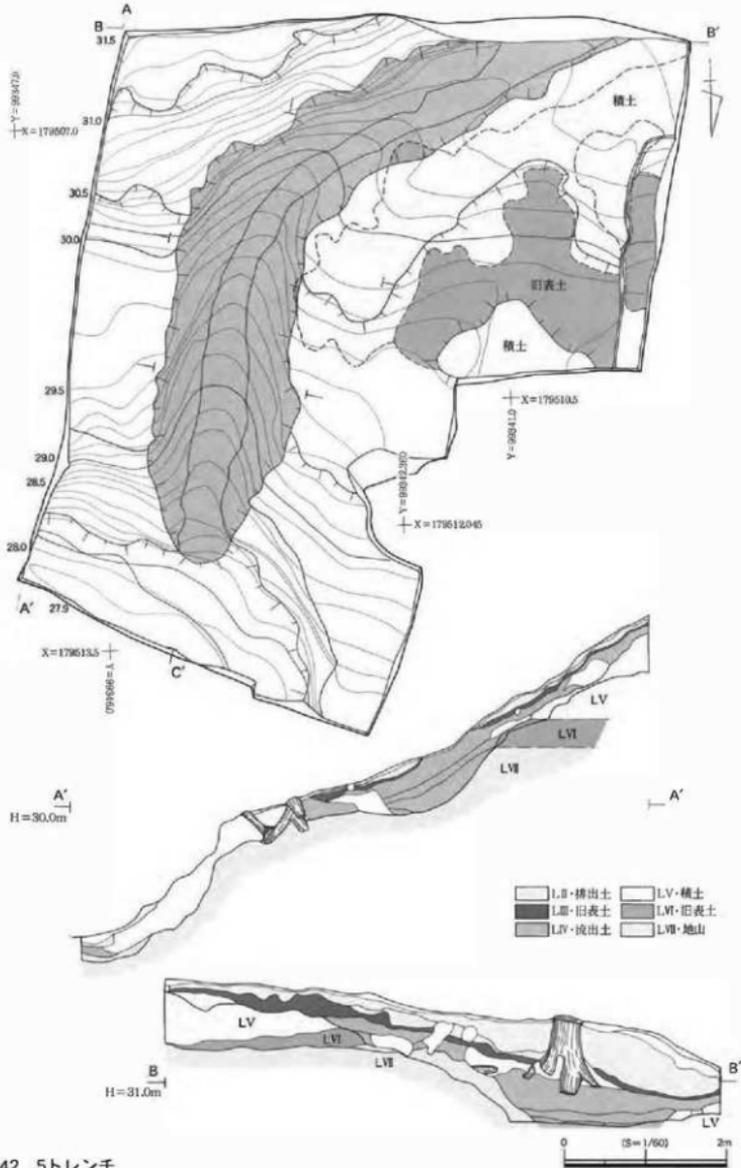


図42 5トレンチ

6 トレンチ (図43. 図版17)

6 トレンチは墳丘主軸線上、後円部先端に設けた調査区である。後円部墳丘構造の解明と墳丘墳端線を確認することを目的とした。

本調査区は5次調査からの継続調査であり、最終的には幅2m×長さ8mの16㎡を調査した。調査区中心で測る座標値は $X = 179497.000$ ・ $Y = 99353.000$ である。

表土を除去した時点で、1次調査時のトレンチが確認された。旧調査区は標高31.1m～31.6mの範囲に広がり、本調査区の上位南半を縦断している。旧調査区は1次調査の際に十字に設定されたA・Bトレンチの間に設けられた補足的な調査区と推測される。この調査区は後円部墳頂平坦面からやや降った地点に位置し、最終的には墳丘積土を掘り下げ、旧表土層上面まで掘り下げている。

次に墳丘構造について後円部上位側から記載する。調査区上位の大部分は旧調査区ならびに視乱により明瞭な墳丘面を確認することはできていない。標高32.9mには傾斜が始まる地形変換線がある。この変換線

は旧調査区の調査停止面と墳丘斜面を区切る変換線である。したがって、本来の後円部墳頂平坦面はこの変換線より上位に位置することになるが、現状ではその様相は分からない。

標高32.9mから31.7mの範囲には墳丘と見られる斜面がある。墳丘傾斜は 32° の角度を有するが、31.5mの傾斜変換線を境に緩く変化し幅1.0mの緩斜面が続く。この緩斜面は31.4m地点まで降った後に急傾斜に変化する変換線に到達する。急斜面は標高29.5m地点で墳丘裾に到達して終了する。

墳丘裾には溝状の遺構がある。この溝状遺

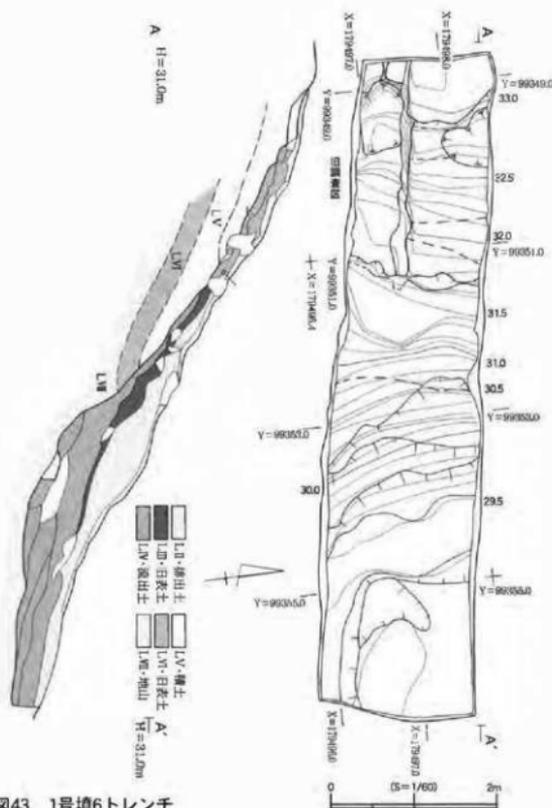


図43 1号墳6 トレンチ

構は後円部北側から後円部の形状に合わせて本調査区に現れるが、本調査区内で2号墳方向に向かって強く屈曲して調査区外へ抜ける。溝は幅1.2m×深さ15cmの浅い皿状である。

7 トレンチ (図 44. 図版 18)

7 トレンチは5 トレンチから続く溝状の遺構を確認するために、くびれ部に設けた調査区である。調査区中心で測る座標地は X=179505.000、Y=99338.000、調査区規模は東西4m×南北2mで設定し、最終的には8mfを調査した。

表土から順に堆積土を除去し墳丘面を確認する過程の間で、土坑 (SK1) を確認した。次に墳丘構造について後円部上位側から記載する。

調査区内で測る最高標高値は31.8mを計測する。この地点は既に墳丘斜面内に位置しており、墳丘積土が見られる。墳丘面は36°の斜度を保持したまま下方に伸び、標高31.5mに位置する傾斜変換線に到達する。この変換線は5 トレンチから続く溝状遺構 (SD1) の下端と同一である。溝状遺構を過ぎると緩やかに標高を上げながら前方部へと到達する。

SD1: 本遺構は調査区を斜めに横断する溝跡であり、5 トレンチ SD1 の延長に位置する。幅2.5cm×深さ35cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は6層に細分された。いずれも墳丘崩壊にともなう流出土と酷似している。

SK1: 調査区中央付近で確

認した土坑である。LIVを掘り込み面とし、遺構上面には1次調査時の表土ならびに排出土がある。遺構の年代ならびに性格を決定する遺物の出土は認められず詳細は不明であるが、墳丘流出土を掘り込み面としていることと、上層には1次調査時の表土ならびに排出土が認められることから、1次調査以前の時期のものであると判断される。

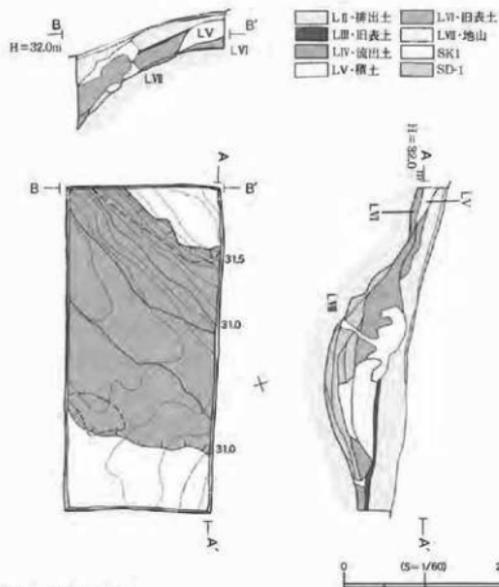


図44 7トレンチ

2号墳(図40・45)

2号墳は墳丘主軸長23mを計測する小型の前方後円墳である。前方部を南に向け、墳丘主軸は丘陵の尾根筋に沿うようになっている。墳丘は微高地状の尾根頂上に築かれており、測量値を超えた墳丘規模に見える。墳丘は尾根の整形と積土によって築造されている。

これまでの調査で明らかとなった墳丘構造をみると、墳丘の下半部は地山を削り出しによって成形され、上半部は積土によ

って築かれていることが明らかとなっている。後円部の形状は円形とも方形とも決定しがたい形状で墳形の確定はされていない。5区の後円部の中でテラス状の平坦面が認められているが、平坦面を段築と呼ぶには疑問が残る。墳丘裾部には地山掘削による浅い溝の掘り込みがある、周溝と位置づけるには今後の調査ならびに検討で決定したい。後円部ならびに前方部では、埋葬にかかる痕跡は認められていない。



図45 2号墳

基本土層

2号墳は過去の発掘調査の経歴がなく、極めて良好な堆積状態にあるため、各区の事実記載を始める前に、基本土層について述べておく。

最上層は表土である(L1)、表土は墳丘全面にあり、厚さ5cm程度である。表土の下層には墳丘崩壊にかかる流出土が堆積する(LII)。流出土は墳丘下側には厚く堆積するが、後円部・前方部の両墳頂平坦面では認められない場所もある。流出土を除去すると、積土(LIII)・旧表土(LIV)・地山(LV)で構成される墳丘が見られる。

3A区(図46、図版19)

3区は前方部西側の墳丘構造を解明するために設けた調査区である。3区は南北に2分割したため、便宜上北側を3A区・南側を3B区とし、今回の調査は3A区で行った。3区は後円部西面や前方部側に近づいた付近に位置し、5次調査で設けた2区とあわせると後円部の1/4を占めることとなる。調査区は東西2.7m、南北6.7m、18㎡の規模をもつ。

表土ならびに流出土を除去した時点の墳丘構造の理解から述べる。調査区内における最高等高線は32.4mを計測し、墳頂平坦面は32.1m付近に位置する。墳頂平坦面から墳丘上位斜面かけた範囲は木根による攪乱が著しく詳細は不明である。かろうじて認識された墳頂平坦面の属にあたる傾斜変換線は31.8mに位置し、この地点から墳丘斜面が始まる。墳丘斜面は39°の傾斜角を保持したまま、標高31.0mの傾斜変換線まで降って終了する。この傾斜変換線を過ぎると、約70cmのやや平坦な面が形成され、標高30.8m付近で再び傾斜が始まる。この傾斜は墳

丘外形に沿うように走る溝状の掘り込みによるもので、幅約 1.5m、深さは 10cm にも満たない。

溝状の掘り込み内部に堆積した土層は、填丘斜面に堆積した流出土と一体のもので判断されたことにより、この溝状の遺構の年代は古墳築造段階まで遡る可能性もある。

墳丘を構築する積土は標高 31.5 ~ 32.4m の範囲に分布し、その下層には旧表土層が見られる。旧表土層は標高 31.2m 付近にあり、これより下層は地山に相当する。

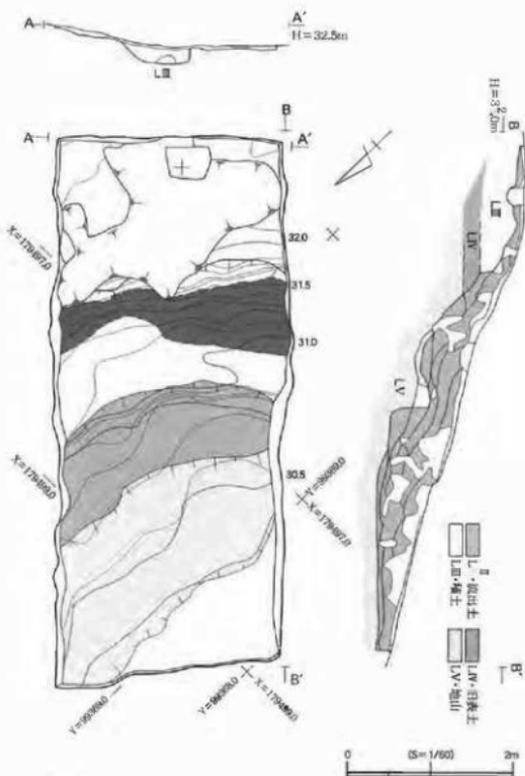


図46 3A区

4区 (図47, 図版20)

4区は前方部西側前端部を中心に、南には墳丘主軸線上まで、北側は3区までの範囲を対象とした調査区である。調査区

中心付近で測る座標値は X = 179492.000, Y = 99366.000 である。調査区は東西6.6m、南北5.7mのやや歪んだ三角形を呈し、調査区面積は 20m² である。本調査区では 2号墳全長と、前方部の形状を確定することを調査目的とした。

以下、上層堆積土を除去したのちに明らかとなった墳丘構造について述べる。

検出された墳頂平坦面の遺存状態は良好で、標高 32.1m ~ 31.8m に範囲に位置する。墳頂平坦面の肩となる変換線は 31.7m 付近にあり、ここから墳丘斜面が始まる。墳丘斜面は 39° の傾斜角度を有し、墳丘裾を示す標高 30.1m の傾斜変換線に到達して終了する。前方部西側には 2条の溝状の遺構が見られる。溝は墳丘裾を形成する地山掘削 (SD1) と、それと重なる SD2 がある。S■2は調査区を斜めに向かう幅 1.1m の溝状の遺構で、3A 区のテラス状の平坦面に対応すると思われる。SD1は墳丘裾を形成する際の地山掘削にともなうものと推測されるが、本調査区では外周は調査区外にあるために不明で遺構の全体規模はわからない。前方部前端付

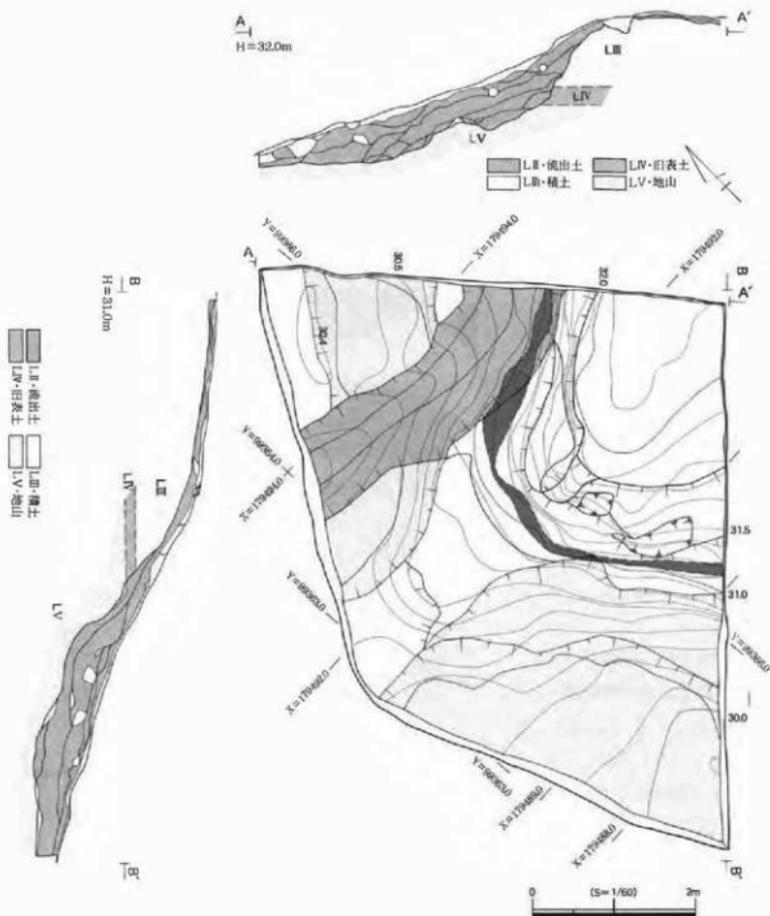


図47 4区

近における地山掘削は明瞭で、南に向かって徐々に低くなっている。SD1・SD2は互いに重なる遺構であるが、土層断面の検討を経ても、墳丘からの流出した土で覆われており明らかな新旧関係は認められない。

前方部の西側前端付近には、SD1による地山の掘削が及ばない部分がある。この部分は地山ロームが遺存し陸橋状の高まりとして残されている。この範囲は幅1.0m、長さ2.6mを計測し、真心で測る方位はN-177°-Eを指す、中心線の東側には前方部西側前端が位置し、対する

西側は1号墳から続く丘陵の尾根筋に乗る。

本調査区では土師器片が出土した。出土した土師器片では図化に耐えうるものはなかったため、図示することはできなかったが、口縁部直下に強い段が付き縦方向の粗いハケ調整が見られることから、栗園式期の裏であると思われる。出土層位はLⅡである。

第5項 調査のまとめ

1 号 墳 (図48)

ここでは6次調査までに設けられた合計7箇所の調査内容を総括し、現段階で明らかとなっている1号墳の状況と今後の調査課題を示し、調査成果をまとめておく。

1号墳では後円部を中心に墳丘構造の解明ならびに埋葬施設の探索が行われている。まずは墳丘規模と墳丘構造について述べる。今回の調査で設けられた6トレンチでは、後円部前縁の墳丘裾が確認された。対する前方部前縁は3次調査の3トレンチで確認されており、この成果をもって導き出された墳丘主軸長は39.3mを計測する。発掘調査を経て得られたこの数値は測量成果で得られた39mの計測値を若干上回るものではあるが、考古学的手法をもって得られた計測値をもって墳丘主軸長を確定する。

墳丘構造については多くの課題が残されることとなった。墳丘は地山の削り出しと積土によって構築されている。北側斜面の墳頂平坦面で測る標高値は34.25m。墳丘裾は標高28.0mで認識しており、その比高差は約6.25mである。墳丘積土範囲は墳頂平坦面～30.0mの4.25m。地山削り出しの範囲は30.0m～28.0mの2.0cmに見られるため、墳丘積土は北斜面の上位約2/3に認められることとなる。一方墳丘南辺については未調査であるため墳丘構造は不明であり、1号墳全体を視野に入れた場合、これまでの調査知見が総合的な状況にあるのかは、今後の調査で把握しておきたい点である。

後円部北側の4トレンチ・5トレンチでは、墳丘斜面の中段となる標高30.0m付近で幅2.4mの平坦面を認めた。平坦面は後円部形状にあわせて4トレンチから5トレンチに向かっている。最終的には前方部墳頂平坦面に至ると想定しているが、この平坦面の収束状況は確認しておくことは重要である。一方6トレンチでは、標高31.0mの地点で平坦面が捉えられている。4トレンチ・5トレンチほど明瞭ではないが、平坦面を境に墳丘積土と地山の層境が見られることは各トレンチと酷似しており、この面を一連の平坦面として捉えてきたい。調査課題としては、これらの平坦面がどのような状況で墳丘南辺へ接続していくのか、墳丘立地と構造解明のためには調査しておく必要がある。

次に本古墳の埋葬施設であるが、墳頂平坦面に設けた1～3トレンチでは埋葬施設ならびにそれに関連する遺構の存在は認められず、墳丘積土内に埋葬施設を構築している可能性は否定された。従って、本古墳に関わる埋葬施設は墳頂平坦面外に設けられていると想定した。4次調査では5トレンチで陥没痕跡と想定した遺構が認められ、調査を続けたが結果的には陥没状の遺構は溝状遺構の一部であり、再び埋葬施設に関する手がかりを失うかたちとなった。図47にはこれまでの調査状況を図示したが後円部の大部分に調査区が設けられており、未調査範囲

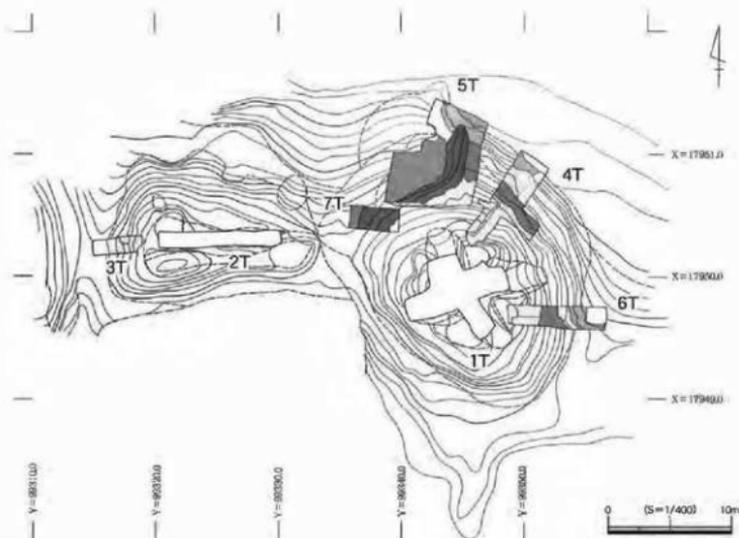


図48 1号墳全体図

はほとんど残されていない状況にある。従って、本古墳に関連する埋葬施設については言及できず、今後の調査計画と、本古墳への再評価が迫られていると言える。

今回の調査における成果の一つとしては、5トレンチから7トレンチにかけてめぐる溝状の遺構の存在があげられる。

この遺構は後円部北側から墳丘斜面を登った後に後円部を西回りにめぐるが、遺構の性格は分らない。堆積土からは須恵器片が出土し、年代的には出土須恵器以降の所産であると言えるが、詳細は不明である。今後、溝状遺構の範囲ならびに性格の解明を継続する必要がある。

2号墳(図49)

2号墳の調査は3A区と4区の2箇所で行われ、これまでの2・5区を合わせた合計4箇所で行われた。

今回の調査における最大の知見としては、前方部前端付近から栗罎式と見られる土器片が出土したことによる。既調査では本古墳の年代を想定できる土器の出土は認められず、年代的な位置付けが困難な状態にあった。従って、今回の調査で栗罎式に比定される土器が出土したことは、本古墳の築造年代を考える上で重要な知見と言える。出土した土器は主として栗罎式の壺であるが、いずれも細片であり詳細は決定しがたく、出土状況を見ても墳丘流出土内からの出土であることから、墳丘が崩壊する過程に混入した可能性も考慮しておかなければならない。ただし、現段階ではこれらの土器資料が唯一の検討に値する資料であり、これらの土器が

本古墳に伴うとすれば、本古墳の築造年代を栗岡式期まで絞り込むことが可能となる。

次に墳丘構造の理解であるが、今回の調査で墳丘主軸長が確定したことを最大の成果としてあげておく。墳丘主軸長については4次調査5区および6次調査4区の調査で、墳丘主軸にのる後円部と前方部の両墳端線が明らかとされた。これらの墳端線は地山を削り出すことで決定されており、その総長は21.2mとなる。この成果は測量調査時点で導き出された23mという計測値を若干補正するものではあるが、発掘調査を経て導き出された計測値を、墳丘主軸長として取り扱っておきたい。

第2の成果としては、3A区・4区の両調査区で認識された平坦面ならびに溝状の遺構の存在をあげておく。SD1とした溝状遺構について、前方部前端ならびに3A区の墳丘裾部の検出状況を見ると、溝の内周線を墳丘裾部ラインとして認識することが可能であり、墳形の決定に大きく関連する可能性のある遺構と理解しておきたい。このSD1が墳丘裾部を形成すると仮定した場合、前方部西側前端で地山が「陸橋」状に掘り残されている部分の存在が際立つ。現段階では、この部分について積極的な意義を見出すことについては控えておくが、しばしば前期古墳に見られる陸橋状の施設と類似性が指摘され、同様の性格が与えられるかもしれない。いずれにしても、今後の調査で本古墳の埋葬施設を確認した上で、改めた検討を要するところであろう。

SD2とした溝状の遺構は、SD1を斜めに横切り墳丘中段を走っている。4区では明瞭な溝状

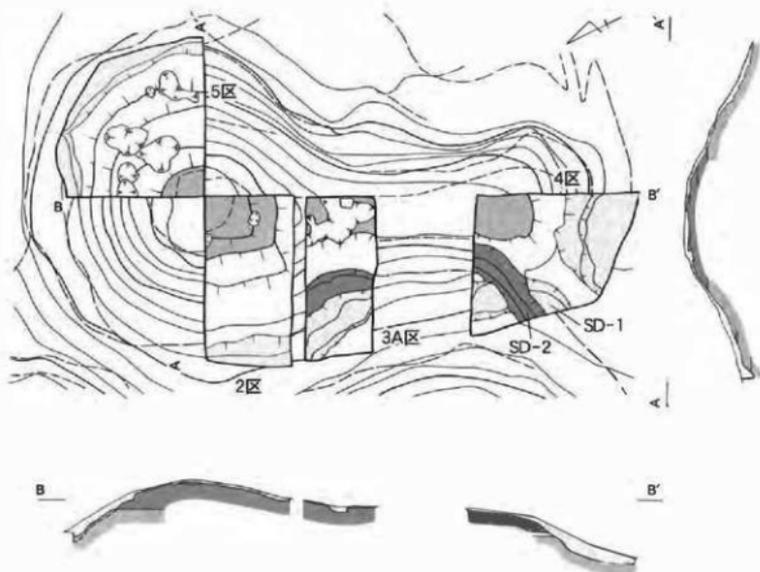


図49 2号墳全体図

を呈するが、3A区では平坦面として存在する。土層断面の検討を経てもSD1とSD2の両者の間に明瞭な新旧関係が認められるわけでもなく、墳丘の築造に関連した一連の遺構の可能性も考えておかなければならない。

現段階では、これらの2条の溝状遺構ならびに平坦面が、墳丘の構造および築造に対してどのような意味を持つかについては言及しがたいが、いずれにしてもこの遺構は古墳築造時期まで遡る可能性も残されており、2号墳の墳丘理解に対しては重要な意味を持つものと評価しておきたい。今後、2区ならびに5区の調査成果を踏まえて総合的な検討を必要としている。

今年度の調査成果は上述したとおりであるが、1号墳と2号墳の墳丘にみられる特徴にはいくつかの共通する要素が見られる。すなわち、墳丘の築造方法・平面形・構造などである。このことは、この2基の古墳の築造に際しては、大きな時間差が存在していないものと推察され、極めて計画的に墳丘の造営が行われたものと考えておきたい。

今回までの調査を経て本古墳群の評価に対して多くの知見が得られたものの、墳形の確定や埋葬施設の確認など、古墳の理解に対して決定的な情報については把握することができずにおり、今後これらの諸課題を解決するために継続的な調査を必要としている。

写 真 图 版



1 調査前 (1 T ~ 2 T 周辺)



2 調査前 (3 T ~ 6 T 周辺)



3 調査前 (7 T ~ 10 T 周辺)



4 4 T



5 5 T



6 作業風景



1 遺跡遠景



3 1 T 調査状況



2 調査区遠景



4 2 T 調査状況



5 4 T 調査状況



1 7 T調査状況



2 7 T検出状況



3 7 T調査後



4 8 T調査状況



5 8 Tと桜井古墳



6 8 T埋め戻し作業



1 A地区調査前



2 A地区土層断面



3 4T調査状況



4 5T調査状況



5 作業風景



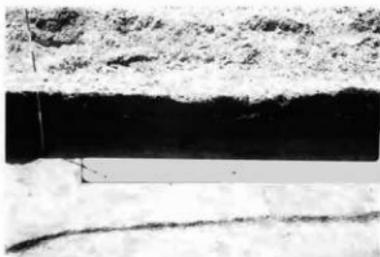
6 A地区埋め戻し作業



1 調査前(1)



2 調査前(2)



3 1T土層断面



4 2T土層断面



5 1T全景



6 2T全景



1 調査区遠景



2 2 T土層断面



3 1 T土層断面



4 作業風景



5 1 T調査状況



6 2 T調査状況



1 調査区遠景(1)



2 調査区遠景(2)



3 施設搬入状況



4 調査前



5 1 T調査状況



6 6 T調査状況



1 4T調査状況



2 5T調査状況



3 3T調査状況



4 1T土層断面



5 作業風景

1 遺跡遠景



2 32T土器棺墓



3 41T製鉄炉跡





1 42T 製鉄炉跡



2 46T 竪穴住居跡



3 65T 焼成土坑



1 弥生土器 (32T)



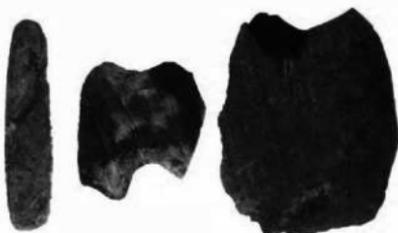
2 弥生土器 (32T)



3 出土遺物(1)

上左右、下左
石應丁(31T)

下右
扁平片刃石斧(32T)



4 出土遺物(2)

左
石ノミ(31T)

中、右
石鏃(中55T、右46T)



1 遺跡遠景 (南から)



2 調査前 (調査区北西部)



3 6T (南西から)



4 10T (北から)



5 12T (南から)



1 調査区遠景 (西から)



2 調査区近景 (西から)



3 1T (西から)



4 1T (西から)



5 1T 土層断面 (西から)

1 遺跡全景



2 檜台



3 東側の堀切



1 京塚沢瓦窯跡B遠景



2 廃滓場



3 鉄滓散布状況





1 5 T 全景 (中央に SD-1)



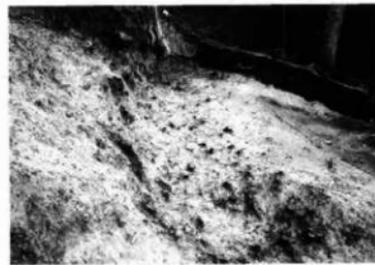
2 SD-1 全景 (1)



3 SD-1 全景 (2)



4 SD-1 下半部



5 SD-1 と墳丘斜面



1 後門部全景



2 6 T 全景



3 墳丘積土と土層断面



1 5Tと7T



2 7T全景



3 後円部と墳丘面



4 6T堆積状況



1 2号墳全景 (左が3A区・右が4区)



2 3A区全景



3 前方部中位墳丘面



4 墳丘面と旧表土



1 4区全景



2 前方部西侧前端



3 前方部前面



4 前端面横裾

報告書抄録

ふりがな	みなみそうましないいせきはつつちょうさほうこくしょ1						
書名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書1						
副書名	平成17年度試掘調査報告						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	堀 耕平・齋藤直之・荒 淑人						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化課						
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番 TEL0244-24-5284						
発行年月日	西暦2006(平成18年)3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯		調査期間 上段:着 下段:完	面積 (㎡)	調査 原因
			東	経			
宮平遺跡	南相馬市原町区 深野字宮平	072125	37° 40' 16"	140° 55' 52"	050601	40	個人宅地
		00002			050603		
西内遺跡	南相馬市原町区 深野字西内	072125	37° 40' 08"	140° 55' 12"	050711	90	道路建設
		00297			050714		
桜井B遺跡	南相馬市原町区 上洗佐字原田	072125	37° 38' 27"	140° 59' 26"	060121	145	道路改良
		00048			060126		
桜井D遺跡	南相馬市原町区 上洗佐字原畑	072125	37° 38' 26"	140° 59' 25"	050721	40	個人宅地
		00045			050722		
新田原遺跡	南相馬市原町区 深野字台畑	072125	37° 39' 37"	140° 55' 52"	050721	40	携帯無線 基地
		00146			050722		
石住遺跡	南相馬市原町区 上太田字石積・馬場字石住	072125	37° 36' 02"	140° 55' 46"	051029	180	基礎整備
		00280			051114		
追合B遺跡	南相馬市原町区 金沢字追合	072125	37° 40' 22"	140° 59' 26"	●51024	1,596	土砂採取
		00312			051129		
京塚沢B遺跡	南相馬市原町区 零字京塚沢	072125	37° 38' 11"	140° 59' 37"	051017	364	土砂採取
		00127			051021		
上洗佐原田遺跡	南相馬市原町区 上洗佐字原田	072125	37° 40' 08"	140° 55' 12"	051116	20	携帯無線 基地
		00218			051125		
泉 館 跡	南相馬市原町区 北泉字雨堤	072125	37° 36' 06"	141° 01' 01"	051212	1,800	再 開 発
		00099			051212		
京塚沢瓦窯跡B	南相馬市原町区 零字京塚沢	072125	37° 36' 06"	141° 01' 01"	060121	19,000	分布調査
		00116			060122		
与太郎内古墳群	南相馬市原町区 中太田字与太郎内	072125	37° 36' 45"	140° 37' 50"	050801	125	保存目的
		00069			060321		
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事項		
宮平遺跡	散布地	縄文	なし	なし			
西内遺跡	散布地	縄文・平安	なし	なし			
桜井B遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	溝(周溝)・土坑	弥生土器・土師器			
桜井D遺跡	集落跡	弥・古・奈・平	竪穴住居・溝	土師器			
新田原遺跡	散布地	奈良・平安	なし	なし			
石住遺跡	散布地	縄文	なし	なし			
追合B遺跡	散布地	平安	製鉄炉・土坑	弥生土器・土師器			
京塚沢B遺跡	散布地	平安	なし	なし			
上洗佐原田遺跡	散布地	縄・弥・古・奈・平	なし	なし			
泉 館 跡	中世城館	中世	曲輪・平場	なし			
京塚沢瓦窯跡	瓦窯跡	奈良・平安	庵埴場7	羽口・鉄滓			
与太郎内古墳群	古墳群	古墳	前方後円墳2・円墳1	土師器・須恵器			

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第2集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書 1

—平成17年度試掘調査報告—

印刷 2006年3月25日

発行 2006年3月31日

編集 南相馬市教育委員会 文化課

発行 南相馬市教育委員会

〒975-0012

福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番地

印刷所 株式会社 まつざき印刷

〒979-1525

福島県双葉郡浪江町大字高瀬字根本内100